

國學院大學文学部考古学実習報告 第45集

長野県安曇野市

# 穂高古墳群

2010年度 発掘調査報告書



2011. 8

國學院大學文学部考古学研究室

長野県安曇野市

# 穂高古墳群

THE HOTAKA TUMULI

2010年度 発掘調査報告書

2011. 8

國學院大學文学部考古学研究室



## 緒 言

信州は名だたる縄文王国である。遺跡の多さと内容の豊富さだけでなく、優れた縄文研究者を数多く輩出してきた。信州は古墳の宝庫でもあり、古墳時代前期の松本市弘法山古墳・千曲市森將軍塚古墳から古墳時代後期の長野市大室古墳群・松本市中山古墳群まで、多彩な古墳文化が展開されてきた。國學院大學考古学研究室が考古学調査法の授業の一環として調査を行っている安曇野市穂高古墳群も信州を代表する古墳時代後期の古墳群の一つであり、現存する81基すべての古墳が安曇野市の史跡に指定されている。すでに破壊されて消滅していった古墳も少なからずあったと推測され、この古墳群が形成された当時は古墳の数も多く、壮大な景観であったことであろう。

穂高古墳群の調査に当たって、2009年度には総数87基以上に及ぶ穂高古墳群のうち、近接して並ぶF9号墳とF10号墳の現状を記録するため、墳丘の清掃と写真撮影、墳形測量を行う一方、穂高古墳群全体の現状を把握するための分布調査を行った。その詳細に関しては『長野県安曇野市穂高古墳群2009年度墳丘測量調査・現状確認調査報告書』（國學院大學文学部考古学実習報告第44集）に報告させていた。なお、この調査に際して、穂高古墳群の歴史の意味合いを実感するために、松本市弘法山古墳・中山古墳群、千曲市森將軍塚古墳、長野市大室古墳群など、長野県の代表的な遺跡と施設の見学を実施した。

二年目にあたる2010年度には、ほぼ完全な形で残っているF10号墳は現状のまま後世に残して、破壊を受けて墳形が大きく損なわれているF9号墳のみを発掘することとし、F9号墳にトレンチを設定して発掘を開始した。設定したのは幅わずか1mのトレンチであったが、南北方向に一例に並んだ石室東側壁の一部を検出することができた。

本来の石室内部にあたる石室側壁の西側部分は古墳を破壊した時に破砕した石室の石と土がぎっしりと詰め込まれた状態であった。残念ながら、トレンチの幅が1mであったため、石室西側の側壁は確認できず、また、石室床面も確認できなかった。石室内部に詰め込まれた破壊時の石の破片や墳丘の盛土などの攪乱物を排除して、石室の本来の姿や規模、構築法を確認し、副葬品の内容や残存状況を確認するのは、次年度以降のこととなる。

また、本来の位置ではなく後の時代の攪乱土中からであったが、須恵器の破片など古墳築造時に関わる副葬品の一部が出土したことも、本年度の調査の成果であった。なお、本年度の調査目的の一つであった周溝の有無の確認はできなかったが、今後の課題として残されている。

最後になりましたが、初年度以来、長野県教育委員会、安曇野市教育委員会、国土交通省、国営アルプスあづみの公園をはじめとする諸機関、桐原健先生をはじめとする諸先生・諸先輩から多大なお力添えとご教示を頂きました。調査が順調かつ成功裏に終わることができたのも、ひとえに皆様方の御蔭と深く感謝いたしております。

2011(平成23)年8月

國學院大學文学部考古学研究室

吉田 恵二

## 例 言

1. 本書は長野県安曇野市穂高柏原に所在する穂高古墳群F9号墳発掘調査の記録である。
2. 本調査は平成22年度國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環として、平成22年8月2日から同年8月11日までの10日間にわたり実施した。
3. 本調査は安蘇谷正彦(國學院大學学長・当時)が主体者となり、吉田恵二(文学部教授)が担当した。現地調査は吉田および深澤太郎(研究開発推進機構助教)・中村耕作(文学部助手)が指導にあたり、江戸邦之・佐藤周平(大学院ティーチングアシスタント)の下、考古学実習生8名・特別参加生27名が参加した。調査・整理にあたっては柳田康雄(文学部教授)・谷口康浩(文学部教授)の指導・協力を得た。
4. 現地調査・整理作業においては多数の機関や個人から協力を得た。芳名を巻末に記して感謝の意を表する。
5. 実測図、その他の諸図版作成、および写真撮影は考古学実習生が主体となって行った。
6. 本書の編集・執筆は、吉田・中村の指導の下に実習生が分担協議した。
7. 個々の古墳の表記方法については、松川村所在古墳を除き、過去の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット+通し番号」で表記し、またそれ以外に別称を持つ場合には過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けでこれを表記した。
8. 今回発掘調査を行ったF9号墳はF10号墳とともに2基の総称として「二つ塚」の別称を持っている。そのため、どちらかを単独で表記する場合に別称を表記するのは適当ではないと判断し、また文章中で多用することを考慮して、本報告書では両古墳に限り別称の表記を省略する。
9. 安曇野市域では2005年の安曇野市発足に至るまで数度の合併・改称が行われている。1889年、市町村制施行に伴い南安曇郡東穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が発足、1921年に南安曇郡東穂高村が改称して南安曇郡穂高村が発足した。1954年に南安曇郡穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が合併して南安曇郡穂高町が発足したのち、2005年には南安曇郡豊科町・穂高町・三郷村・堀金村と東筑摩郡明科町が合併して安曇野市が発足した。本文中では、旧町村名の表記が必要な場合のみ「旧」を頭につけてこれを表記した。
10. 表紙写真(写真図版原写真)は安曇野市教育委員会より提供を受けた。



# 目 次

緒言

例言

目次

## 第 I 章 調査・研究の目的

- 第 1 節 調査・研究の目的……………(長島美砂希) 1
- 第 2 節 穂高古墳群の位置づけ……………(長島美砂希) 1
  - (1) 長野県内の古墳と穂高古墳群…………… 1
  - (2) 群集墳の研究と穂高古墳群…………… 2

## 第 II 章 発掘調査日誌……………(長島美砂希) 4

## 第 III 章 遺跡の位置と歴史的環境

- 第 1 節 穂高地域の地理的環境……………(酒匂喜洋) 6
  - (1) 松本平の位置・環境…………… 6
  - (2) 各扇状地の概要…………… 6
  - (3) 調査地付近の地形・地質…………… 9
- 第 2 節 松本平の歴史的環境……………(伊原 駿・森 知之) 10
  - (1) 旧石器時代・縄文時代…………… 10
  - (2) 弥生時代…………… 10
  - (3) 古墳時代…………… 10
  - (4) 古 代…………… 13
- 第 3 節 穂高古墳群と周辺の古墳……………(坂倉永悟・日原章博) 15
  - (1) 穂高古墳群…………… 15
  - (2) 周辺の古墳…………… 17

## 第 IV 章 穂高古墳群 F 9 号墳の調査

- 第 1 節 調査地の概要……………(浅海莉絵) 24
- 第 2 節 調査の方法……………(浅海莉絵) 24
- 第 3 節 第 I トレンチ……………(浅海莉絵・北澤宏明) 26
  - (1) 調査の経過…………… 26
  - (2) 基本土層…………… 26
  - (3) 石 材…………… 26
  - (4) 出土遺物…………… 26
- 第 4 節 第 II トレンチ……………(大久保聡・北澤宏明) 30
  - (1) 調査の経過…………… 30
  - (2) 基本土層…………… 30

第V章 2010年度調査の成果と考察	
第1節 2010年度調査の成果と課題	(浅海莉絵) 32
第2節 穂高古墳群における石室の検討	(戸田千暁) 32
第3節 出土須恵器の検討	(北澤宏明) 35
第VI章 おわりにあたって	(長島美砂希) 36
引用・参考文献	37
発掘調査参加者・関係者一覧	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 長野県の主要古墳と古代寺院	2	第8図 F9号墳2010年度調査区	25
第2図 長野県全体図	6	第9図 F9号墳石室側石模式図	26
第3図 烏川段丘分布図	7	第10図 第Iトレンチ平面図・断面図	27
第4図 松本平の地質分布図・柱状図	8	第11図 F9号墳出土遺物実測図	29
第5図 松本平の古墳時代集落と古墳	11	第12図 第IIトレンチ平面図・断面図	31
第6図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡	18	第13図 穂高古墳群の主要石室	34
第7図 F9号墳と田塚原配水池	24	第14図 E6号墳(狐塚3号墳)出土須恵器	35

## 表目次

第1表 松本平の古墳一覧(1)~(4)	20
---------------------	----

## 写真図版目次

図版1 F9号墳の旧状	図版12 第Iトレンチ西壁(A7)・(A8)
図版2 除草前全景	図版13 第Iトレンチ西壁(A9)・(A10)
図版3 除草後全景	図版14 第IIトレンチ全景(墳丘裾から)
図版4 第Iトレンチ全景(墳丘裾から)	図版15 第IIトレンチ全景(墳頂部から)
図版5 第Iトレンチ全景(墳頂部から)	図版16 第IIトレンチ北壁(B1)・(C1)
図版6 第Iトレンチ石列	図版17 第IIトレンチ北壁(D1)・(E1)
図版7 第Iトレンチ側壁(A1・2)(A3・4)	図版18 第IIトレンチ北壁(F1)・(G1)
図版8 第Iトレンチ側壁(A5・6)(A7・8)	図版19 第IIトレンチ北壁(H1)・東壁(G1)
図版9 第Iトレンチ西壁(A1)・(A2)	図版20 トレンチ埋め戻し後全景
図版10 第Iトレンチ西壁(A3)・(A4)	図版21 F9号墳出土土器
図版11 第Iトレンチ西壁(A5)・(A6)	図版22 F9号墳出土硬貨・釘



## 第 I 章 調査・研究の目的

### 第 1 節 調査・研究の目的

國學院大學考古学研究室では、2009(平成21)年度から考古学実習の一環として新たに長野県安曇野市を中心に所在する穂高古墳群を調査対象地に定めた。穂高古墳群は長野県安曇野市西部、標高600m～700mの烏川と中房川の扇状地上の山麓地に87基以上点在する古墳の総称で、長野市大室古墳群や松本市中山古墳群とともに長野県を代表とする群集墳である。

過去に石室を主体とした発掘・測量調査や数度の分布調査が行われているが、研究者・調査主体者の視点の違いも大きく、土地開発や盗掘など人為的な古墳の破壊の影響も受け、調査年度によって古墳数に差が生じていたり、また調査が行なわれた古墳であっても詳細な実測図が作成されていないなど、情報が把握しづらいのが現状である。墳丘・石室・出土品を一体とした総合的な調査例もない。

また、これまではA群など穂高古墳群の中でも北に分布している古墳の調査が中心に行われており、古墳群南部の調査はあまり行われていなかった。以上の現状を踏まえ、当研究室では古墳群南部に位置するF群の中でも烏川の左岸側にあるF9号墳・F10号墳を調査対象地とし、継続的な学術調査によって、古墳群が形成された当時の生活環境や権力関係、地域の特色を明確にすること、古墳群を構成する個々の古墳の現存状況の把握を行い、穂高古墳群の歴史的意義を後世に伝えていくことを目的として調査を開始した。

2009年度はF9号墳・F10号墳の墳丘測量を中心に墳丘遺存状態の確認と、石室の状況確認を行った。またA群からF群に区分されている古墳群のうち、E群・F群の現状確認調査も実施した。

今年度は前年度の成果を踏まえ、古墳内部の状況についての情報を得るための発掘調査を実施した。比較的保存状態のよいF10号墳は後世のために現状のままに残し、F9号墳の内部状況と墳丘の範囲の確認調査を行った。具体的には主軸に沿って第Iトレンチ(幅1m・長さ10m)を設定し、第IトレンチのA1グリッドから西に第IIトレンチ(幅1m・長さ7m)を設けた。第Iトレンチでは石室・羨道部側壁の幅・高さ・長さの計測を行い、第IIトレンチでは石室側石の把握と墳丘の範囲、墳丘の土壌堆積状況を確認した。(長島)

### 第 2 節 穂高古墳群の位置づけ

#### (1) 長野県内の古墳と穂高古墳群

長野県内では約3000基の古墳が確認されているが、そのうち約70%は善光寺平と伊那谷に所在する。長野県には松本・伊那・佐久・善光寺の4つの盆地があり、それぞれ独自の地域圏を成している。長野県内最古の古墳は3世紀後半に造られたとされる松本市弘法山古墳であるが、前期古墳の多くは善光寺平に位置する。飯田市勘介山古墳、中野市蟹沢古墳、長野市川柳將軍塚古墳・姫塚古墳、千曲市森將軍塚古墳などがあり、森將軍塚古墳や川柳將軍塚古墳の時代には前方後方墳から前方後円墳に変化し、墳丘の大型化の傾向が見られるようになる。中期には引き続き善光寺平中央部を中心に前方後円墳が築造されるようになり、中野市七瀬双子塚古墳・高遠山古墳、千曲市土口將軍塚古墳・倉科將軍塚古墳など大型の前方後円墳が主流になるが、この頃から各地で円墳が集約的に造られはじめる。松本市の桜ヶ丘古墳・針塚古墳もその一例である。後期には分布の中心を伊那谷に移し、飯田市塚原二子塚古墳・馬背塚古墳などの前方後円墳が築造され、墳丘の規模も副葬品も充実する。その後徐々に大型の古墳は姿を消し、これまでよりも小規模の円墳が盛んに造られるようになり、長野市大室古墳群、松本市中山古墳群、安曇野市穂高古墳群のような古墳群が形成されていった。



の議論がされている(白石1988、楠本1996、大塚2000、土生田2000)。穂高古墳群についても支群ごとに集落遺跡と対応させ被葬者の居住地の推定を試みた桐原健氏(桐原1991・1996・2004)、副葬品の差異や追葬年代を通して、穂高古墳群をめぐる研究成果の概観を古墳群の範囲や形成時期、周辺集落との関係や被葬者の問題についてまとめた三木弘氏(三木1987・1990・1991・2006)などにより、発掘調査が行われるようになった1980年代から各古墳群の実態が明らかになってきたのである。

現時点では穂高古墳群の首長墓は確認されていないが、1987年奈良県藤ノ木古墳の発掘調査で出土した金銅製冠に表現されていた鳥形の装飾と酷似した「鳳凰形銅葉」とされる遺物が穂高古墳群のいずれかから出土していたことが明らかになっている。両者の鳥形は非常に形が似ており、藤ノ木古墳出土の金銅製冠の一部ではないかとも言われている(穂高町教育委員会1989)。金銅製冠はあまり出土例が無く、全国でも三十数か所でのみ確認されている。これらは5世紀後半から6世紀に築造された古墳から出土しており、松本平でも5世紀中頃の桜ヶ丘古墳から金銅製冠が出土している。冠は権力を表す象徴として使用されていたが、この当時はまだ冠位制度が成立する以前であり、各地で出土している冠にも共通点がほとんど見られない。したがって、この頃の冠は冠位を示すというよりも漠然とした権力の表現として扱われていたと考えることができる。そして、冠の一部と思われる鳥形の遺物が出土した穂高古墳群は、この地域の生活環境や政治的な様子を知る上で重要な資料である。

後期以降、推古期の前方後円墳の築造の禁止、さらには大化の薄葬令によって古墳の埋葬儀礼そのものが禁止され、古墳時代は終わりを迎えることになる。地方では薄葬令が伝わるまで古墳の築造は行われていたと推測されるため、長野県における古墳時代の終わりは8世紀から9世紀に降る可能性がある。古墳築造の禁止は大和王権の政治体制の完成を意味し、古墳に代わる象徴が寺院の建築に移行しはじめることで、急速に寺院が建立されるようになる。

長野県内最古の寺院は穂高古墳群の対岸にある安曇野市明科廃寺と考えられ、7世紀後半の瓦が確認されている。このほかに長野県内には長野市の善光寺周辺(7世紀後半～9世紀)、千曲市の雨宮廃寺(7世紀後半～8世紀初頭)、須坂市の左願寺廃寺(7世紀後半～8世紀前半)、飯田市の上川路廃寺(7世紀後半)など7世紀代に建立された初期仏教寺院が確認されている(上田市立信濃国分寺資料館編 2005)。また明科廃寺で出土した軒丸瓦と類似するものが滋賀県、岐阜県、山梨県から出土しており、この頃には信濃に東山道が開通し、それに伴って造瓦技術の伝播や仏教信仰が広く浸透していった背景がうかがえる。

後期古墳と群集墳をめぐる研究は戦前から広く進められ、現代ではそれぞれの古墳を築いた集団の様子を少しずつ窺い知ることができるようになってきた。また、各地域で古墳群を形成した集団の生活環境の変化や集団同士の関係を見出すことは、古墳群形成の背景をより詳しく知る上で重要となる。(長島)

## 第Ⅱ章 発掘調査日誌

### 8月2日(月) 晴れ

実習生は13時頃徳高駅に到着。その後、14時に現地で作業していた先遣隊に合流し、国営アルプスあづみの公園内F9号墳の除草作業を開始した。作業後の現場ミーティングでは昨年度の先輩方からF9号墳・F10号墳の墳丘測量調査の内容と墳丘現存状態の説明を受けて現状を把握し、翌日からの調査に備えた。

### 8月3日(火) 晴れのち雨

午前中は除草作業を続行し、午後には発掘調査前の古墳の全景写真撮影を行った。墳丘主軸に沿って第1トレンチを1m×1mごとにA1からA10のグリッドを設定したのちに、第1トレンチの発掘と、見逃した遺物がないよう取り除いた土の篩い作業を開始した。第1トレンチ内は根が多く作業が難航したが、A2から一銭硬貨、A6から五銭硬貨、A8から土師器片2点が出土した。その後、降雨のため16時で作業を終えた。

### 8月4日(水) 晴れ

1班は引き続き第1トレンチの掘り下げと取り除いた土の篩い作業を行った。A1からA6までのグリッドでは東側の壁に大きな石が確認することができた。またA1から硬貨3点、A8・A9から釘2点と細かい須恵器片、土師器片が合計11点出土した。2班は長野県を代表する大室古墳群、弘法山古墳、森将軍塚古墳を見学し、大室古墳群では実際に石室の中に入るなど現地の古墳に触れ、多くのことを肌で感じる事ができた。

### 8月5日(木) 晴れ

1班が古墳見学のため、2班が中心となって第1トレンチの掘り下げを行った。A1からA6までのグリッドの一例に並ぶ大きな石が石室の東側壁であると推測された。本日中に石室の規模を特定できる範囲まで掘り進める予定であったが、昼前に公園内に熊が出没して作業中止となったため急遽予定を変更し、現場にいた実習生は安曇野市立徳高郷土資料館と徳高古墳群のA1号墳(陵塚)を見学した。

### 8月6日(金) 晴れ

本日は桐原先生ら各先生方がお見えになったため、ここまでの発掘作業の経過について吉田恵二教授から現場で説明が行われた。

作業は再び1班と2班が現場で合流し、ともに第1トレンチの掘り下げを続行した。A1からA6までは大きな石が多く、発掘作業が難航した。A7からA9は特に大きな石はなく、径が10cm前後の小石が多く出た。第1トレンチではA2・A3から硬貨が、A8・A10から土師器片と須恵器片が検出された。また、表土層の下に性質の異なった層がみえたので平面で掘り下げて精査し、翌日の土層断面写真の撮影のために墳丘の清掃作業を行った。





#### 8月7日(土) 晴れ

午前中は第Ⅰトレンチの土層断面写真をグリッドごとに撮影。その間、反対側の石室西側壁の確認を目的として第Ⅱトレンチを設定し、A1の西壁に接するB1とその西側にH1までグリッドを設定し、B1はA1の土層断面図を記録するまで手を付けず、B1以外の掘り下げを行った。第Ⅱトレンチは小礫が多いので、篩をかけずに表土層を除いていった。



第Ⅰトレンチは1層と2層に分層した後、土層断面写真の撮影が終わったA7からA9の西側断面図を作成した。

#### 8月8日(日) 曇り

午前中から7日に引き続き土層断面写真を撮影し、第ⅠトレンチのA1からA6の西壁の断面図と平面図の作成を中心に作業を行った。

第Ⅱトレンチは本来の盛り土である黒色土まで掘り下げる予定であったが、表土層を取り除く段階で釘や近現代遺物、さらにはゴムチューブなどが見つかり、墳丘西側の大幅な削平が確認された。その後、第Ⅱトレンチ土層断面図と北壁断面図を作成した。



#### 8月9日(月) 晴れ

第Ⅰトレンチ、第Ⅱトレンチの土色と土層堆積状況を確認しながら、引き続き各トレンチで断面図、平面図の作成を行った。第Ⅱトレンチでは金属片や和釘が見つかる中、土師器片が1点出土した。そのまま掘り進めていくとG1・H1で土層が変化したため平面で精査し、最終的に第Ⅱトレンチの調査は調査後の側壁の全景と古墳全景を撮影して終了した。その間、作業を終えた人から機材の整備と清掃を行い、翌日のトレンチの埋戻し作業に備えた。



#### 8月10日(火) 晴れのち雨

『信濃毎日新聞』地域版に「国学院大生が古墳調査 国営あづみの公園」の見出しで記事が掲載される(15日には『市民タイムス』にも「横穴式石室の一部確認」として記事掲載)。



午前中は1班と2班に分かれA1号墳(陵塚)とD1号墳(魏石鬼窟)の見学を行った。現場の作業では第Ⅰトレンチの東側壁の大きな石のレベルングを行い、石の厚さを測り図面に残し終えたところで今年度掘り下げた範囲までの第Ⅰトレンチ、第Ⅱトレンチの断面図、平面図の記録を完了した。



午後には両トレンチの埋戻し作業に入り、次年度への課題を残して無事に今年度の作業を終了した。

#### 8月11日(水) 晴れのち雨

宿舎にて、機材の最終点検と積み込みを行った。小雨の降る中、宿前にて集合写真を撮影した。10日間におよんだ調査を終えて、各自帰路についた。(長島)

## 第三章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 穂高地域の地理的環境

#### (1) 松本平の位置・環境

長野県は南北約212km、東西約120km、総面積は約13,562km<sup>2</sup>に及ぶ本州中央部に位置する内陸の県である。県内の地形は山地と河川によって形成されており、主要河川流域にはいくつかの盆地が存在する。松本平もそれらのひとつであり、北部の大町市から南部の塩尻市まで、ほぼ北北西から南南東の方向に幅を広げながら延びていく盆地である。松本平にはフォッサマグナの西縁にあたる糸魚川―静岡構造線が通っており、西側にある3,000m級の飛騨山脈(北アルプス)と東側にある丘陵性の筑摩山地に挟まれる。飛騨山脈から発源するいくつかの河川により複合扇状地が形成され、安曇野市明科を底にした搦鉢状の地形である。

古墳群が所在する安曇野市穂高地域は松本平の西部に位置する。形状は東西に長い楕円形である。西境の北アルプスには南から燕岳、大天井岳、常念岳が並ぶ。穂高地域は北アルプスの山々が属する日本アルプス国立公園の山岳地帯だけで地域面積の7割を占める。東部は沖積地である松本平となっている。また、穂高地域は西部にある北アルプスの大天井岳から東部平坦部の穂高川・犀川の合流地点までの標高差は約2,400mあり、この大きな標高差と豊かな降水量により北の中房川と南の烏川は広大な扇状地を松本平に形成し、主要な集落と生産拠点が展開する。この標高差の間には寒帯から暖温帯にわたる幅広い気候が存在し、多様な種類の生物を擁する。

#### (2) 各扇状地の概要

##### 中房川扇状地

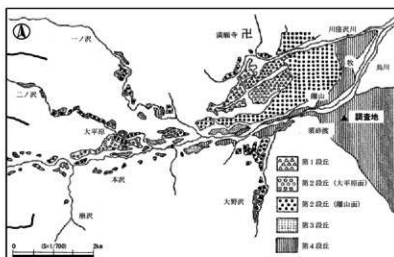
北アルプスに源を発する中房川と烏川は穂高地域の主要河川である。この二つの河川はそれぞれ扇状地を形成しており、穂高古墳群は両扇状地を中心に広がる。中房川は標高約2,160mの東沢乗越に源を発し乳川と合流し乳房川(穂高川)となるまでの全長約16.1kmの河川である。支流は北谷川などであり、山地内の流域面積は約57km<sup>2</sup>に及ぶ。本流と複数の支流により山地は浸食を受け、急峻な地形を形成する。また下方侵食が盛んなことから中房川は斜面がV字谷を形成しており河床礫は大きく、多くの場所で、有明山をはじめとする花崗岩地帯の基盤岩が露出して渓谷をなしている。そのため、渓谷の出口にある鼠穴橋付近で確認される礫は、主に有明花崗岩をはじめとする花崗岩類である。

この中房川が形成する扇状地は、扇頂が宮城の標高約750m地点にある。ローム層が堆積していないことから、離水期は1万年以降の完新世である。面積は約23km<sup>2</sup>で、有明地区の平坦地のほぼ全域を占める。複合扇状地地帯であるが、形も他の扇状地に影響されることなく、山地を出てからほぼ180°で平地に広がる。全体が平行四辺形に近く、北西―南東方向に長軸をとり穂高川に向かっている。この扇状地は中央を貫流する用水堰の油川を境として、北側の扇頂から扇尖は耕作不能地が多く、旧河川がそのまま松・檜・櫻の林に覆われている。扇頂部に位置する矢村・宮城ではしばしば、径5mを超える花崗岩の押し出しがみられる。この巨礫は古くから穂高古墳群の石室などの石材として利用されてきた。



第2図 長野県全体図

しかし、扇状地中央部では長径5cm～30cmの花崗岩礫と同質の粗粒砂が堆積する。さらに扇端近くの立足から耳塚付近ではクロスミナの発達する中粒から細粒の砂を主として、間に灰白色のシルト層を挟み、ときどき細礫が混ざった地層となる。この堆積物は左岸扇尖の徳高北小学校の地点で地下85m付近にまで達する。このような堆積物の粒度の急激な変化は、風化しやすい有花崗岩地帯を後背地に持つこの扇状地の特質とみなされる(仁科1991)。



第3図 鳥川段丘分布図 (伊藤1983を一部改変)

### 鳥川扇状地

鳥川は蝶ヶ岳から流れる蝶ヶ沢が本流で、全長は約16kmである。支流は一ノ沢、大野沢、崩沢、二ノ沢などがあり、山地内の流域面積は約69km<sup>2</sup>である。須砂渡およびその西方の扇頂部より上流では基盤岩に対して狭くて深いV字状の谷を形成している。中流までは溪流をなしているが、上原北方を過ぎると、粗粒物質からできている鳥川扇状地に吸収されるために水量は激減する。そのため古代の遺跡は扇尖に少ない。河床は粘板岩・硬砂岩・チャート・ホルンフェルスなど、中・古生層の礫が占め、全体的に黒っぽい岩石が多い。扇尖に位置する富田南方の鳥川沿いでは、現河床のものほとんど同類の礫が地表から約15mにわたって堆積している。

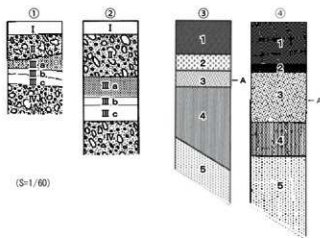
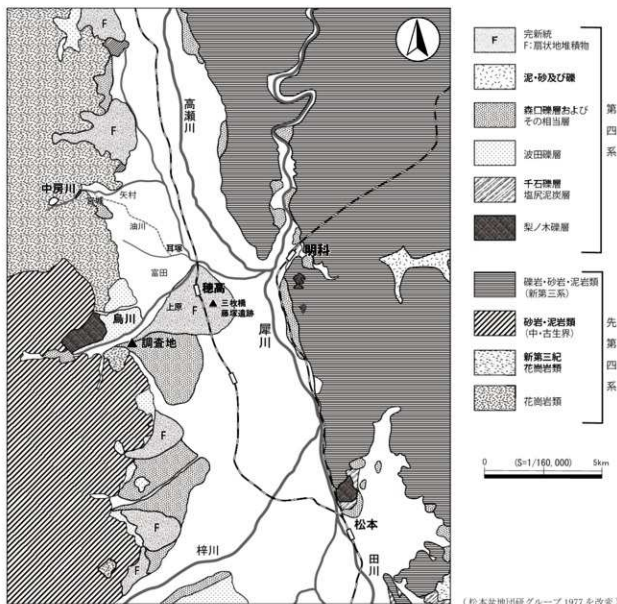
鳥川扇状地の形成年代は、更新世から完新世にかけてである。鳥川扇状地は須砂渡より上流が鳥川沿いに5段の河川段丘が形成され、下流は広大な扇状地が広がる(第3図)。第1段丘は梨ノ木礫層の堆積面にあたる。地表に残っているのは珍しいことであり、普通は松本平の地中深くにある。第2段丘は第1段丘を取り巻く形で発達している。第3段丘は一ノ沢との合流付近から上流に連続して発達する。扇状地性の礫層である波田面にほぼ対比される。第4段丘は峡谷部では侵食段丘であり、離山と須砂渡の古城山の間を抜けた下流部から扇状地となる。扇頂を須砂渡とし、北は富田から橋爪の線で中房川扇状地と、南は堀金地域の田多井で黒沢川扇状地と接する。扇端はJR大系線の周辺に達する。しかしJR大系線の線路を越えて徳高地域の中心地東側まで延びるとも読み取れ、その場合の面積は約30km<sup>2</sup>となる。

また、鳥川扇状地の遺跡数が中房川扇状地よりも多い理由として、鳥川扇状地では二次的ローム質土の堆積する耕作に適した土地から各時代の遺物が出土するのに対し、中房川扇状地は花崗岩の風化物の堆積からなるので、水の浸透が強い瘠地であることが関係する(重野2007)。

### 明科地域との対比

徳高地域の特徴は松本平西側の徳高古墳群と向かい合うように松本平東側に位置する明科地域と比較することができる。明科地域には信州最古の寺院であったと思われる明科廃寺遺跡などが所在し、古代安曇野の歴史を考える上で重要である。この地域は高瀬川・徳高川・犀川の合流する松本盆地で最も標高の低い地域である。また平地が少なく、ほとんどが筑摩山地の一部となっている。この地域は新生代新第三期にフォッサマグナの海底に位置していた。この時に堆積した砂礫や泥から形成された堆積岩類の層が中山山地や筑摩山地となった。そのため弱い細粒物が多く、浸食されやすい。これは花崗岩を主体とする徳高地区と対照的である(第4図)。

明科地域の遺跡の多くは山麓縁から離れた低位段丘にあり、特に河川が大きく曲流する位置の内側に立地する。犀川右岸に位置する現在の明科地域の中心地は古代から遺跡が多数存在するが、粘土質で水はけが悪いために開発されたのは古墳時代以降である。



**F 9号墳南側付近(柱状図①・②)**  
 (長野県埋蔵文化財センター編 1997 を一部改変)  
 第I層: 水田耕作土(黒ボク土)  
 第II層: 水田床土(砂礫)  
 第III a層: 田表土A土壌(火山灰質黒ボク土)  
 第III b層: 田表土B土壌(黒ボク土及び砂礫)  
 第III c層: 田表土C土壌(火山灰土及び砂礫)  
 第IV層: (砂礫)

**三枚橋・藤塚遺跡(柱状図③・④)**  
 (安曇野市教育委員会編 2009 を一部改変)  
 1層: 地表面(ブルドーザー面)  
 2層: ③酸化砂礫 ④火災炭化物  
 3層: 黄褐色土(シルト混入)  
 4層: 灰褐色砂礫  
 5層: 黄褐色土シルト  
 A面: 遺構面

調査地周辺と扇端部の堆積比較の一例として国営アルプスあづみの公園内及び三枚橋・藤塚遺跡から上層柱状図を2例ずつ選択して掲載した。各柱状図の説明表記は両遺跡の報告書をもとに掲載したが本図の編集上、名称の改変・説明の省略を行った。

第4図 松本平の地質分布図・柱状図



### (3) 調査地付近の地形・地質

#### 地形の形成

F 9号墳は烏川扇状地の渓谷の出口から約700m下流の烏川第4段丘の上に所在する。このことから、須砂渡から下流のみを烏川扇状地と見た場合は、ほぼ扇頂部ともいえる。F 9号墳の北側約100m地点に現在の烏川の流路があり、比高差は約10mある。南側に100m程の地点には沢筋が認められている(長野県埋蔵文化財センター編1997)。現在、墳丘より南側のこの付近には上川や下川(別名:矢原沢)と呼ばれる用水路および、これらの分流が流れている。この上川・下川が流れている付近には、1万年から2万年ほど前に烏川本流が流れていたと考えられる。今回はこの旧烏川本流についての調査をしておらず、この沢筋と関係があるのかは断定できない。旧烏川は烏川第4段丘を形成した河川の一つであり、1万年ほど前に現在の扇状地開口部の地点から左岸に沿って花崗岩の岩盤を侵食して現烏川となり、現扇状地への堆積が始まったとされる(重野2007)。また、現在矢原沢は烏川右岸から取水しているが、かつては旧烏川左岸から分かれてF10・F9・F8号墳の脇に沿って流れる自然流路であったと考えられる。そのほかにも、F9号墳周辺には自然流路が複数あったと思われる。

微地形環境分析によると、烏川扇状地は紀元前1世紀に大洪水が発生し、完新世Ⅰ面が形成された。その後、しばらく地形が安定した状態が続いたが、10世紀ごろに再び大洪水が発生し、完新世Ⅱ面が形成された。この時、扇頂に近いF9号墳の周辺の流路も氾濫を起こしたと考えられる。矢原沢に最も近かったF8号墳は壊滅的被害を受けたとされる。これ以降安定した状態が現在まで続き、大きな堆積を受けていないことから、現在の河川の蛇行状況や地表微地形は12世紀以降に形成されたと見られる。ただし、文献史学や考古学による裏付けはまだまだされておらず、これから更に研究する必要がある。

#### 調査地の地質

1996年10月に国営アルプスあづみの公園の開発に先立ちF9号墳の約50m南で行われた土層調査では、以下の6層が確認されている。第Ⅰ層は水田耕作土で、第Ⅱ層は砂礫層で水田の床土である。続く第Ⅲa層は火山灰起源の黒色土であり、旧表土であると考えられ、縄文時代から近世の遺物が微量出土している。第Ⅲa層の特徴は、今回のF9号墳の調査で第2トレンチ検出された第3層と類似する。続く第Ⅲb層は褐色土で、縄文時代から古墳時代の土器片が検出されている。黄褐色で土壌化されていない第Ⅲc層と、その下の砂礫層である第Ⅳ層からは遺物が検出されていない。

烏川扇状地右岸の調査地付近は、表層腐植質黒ボク土と中粗粒灰色低地土灰色系の土壌が分布する。旧表土である1996年調査第Ⅲa層以下の層の土壌の特徴が今回の調査で検出された層に近いことから、今回の調査地点は前者であると考えられる。しかし、これらの層の中に完新世以降の二度の大洪水による堆積に当てはまる層があるかは不明である。現時点では今回の調査で確認された土層だけで古墳自体の範囲内や構築方法確認できないことや、前述したようにこの地点は扇状地に近く、複数の流路が存在していたことから、50m南の層と全く同じであるかは定かではない。

また、調査地から約4km～5km離れた扇状地扇端には三枚橋遺跡やハツコ遺跡など、弥生時代から中世までの集落跡が複数確認されている。これらの遺跡はシルト質土を掘りこんで住居跡が建てられている(安曇野市教育委員会編2009・2010)。現表土である烏川の影響によると思われる堆積土の下に複数のシルト質土が重なる形となっており、シルト層の間からかつて流路(沢)が存在したことを示す。ここを流れる自然流の流路は一定ではなかったことがうかがえる遺跡もある。このことから扇頂のみならず、かつて扇端も洪水時の影響が大きかったことが考えられる。

(酒匂)

## 第2節 松本平の歴史的環境

### (1) 旧石器時代・縄文時代

松本平には旧石器時代の遺跡は少なく、塩尻市和手遺跡でナイフ形石器が多数見つかる程度である。縄文時代草創期の遺跡は発見されていない。早期には塩尻市一夜窪遺跡・向陽台遺跡、大町市山の神遺跡などが挙げられる。松本平の前期の遺跡は早期と比較すると増加傾向にあり、松本平では塩尻市男屋敷遺跡・北原遺跡・女夫山ノ神遺跡、松川村有明神社遺跡、大町市上原遺跡・藪沢Ⅰ遺跡・一律遺跡などが挙げられる。中期では特に後半を中心とした大規模な遺跡が発見されており、遺跡数もこの時期がもっとも多い。大規模な遺跡の多くは南部の東山山麓と西山山麓に、大半は西山山麓に集中する。西山山麓では朝日村熊久保遺跡、山形村三夜塚遺跡・殿村遺跡、安曇野市東小倉遺跡・離山遺跡・他谷遺跡、東山山麓では塩尻市埴原遺跡・小丸山遺跡・平出遺跡、松本市小倉・一ツ家遺跡・大村塚田遺跡・坪ノ内遺跡などが確認されている。後期に入ると繁栄した中期と比べて遺跡が急激に減少し、山麓や台地から低地へ移る傾向にある。この時期の遺跡としては松本市林山腰遺跡・井刈遺跡・葎原遺跡、安曇野市北村遺跡・離山遺跡などが挙げられる。晩期の遺跡数はさらに減少し、塩尻市福沢遺跡、松本市石行遺跡・エリ穴遺跡・女鳥羽川遺跡、大町市一律遺跡等が挙げられる。

### (2) 弥生時代

弥生時代前期の代表的な遺跡として、塩尻市下境沢遺跡、松本市横山城遺跡・境窪遺跡・針塚遺跡、安曇野市ほうろく屋敷遺跡が挙げられる。中期に入ると集落は規模も広がり、長期間の継続がみられるようになる。松本市百瀬遺跡は、土器の種類も壺・甕・鉢・無頸壺・高杯のセットが揃っていることから、この時期の遺跡の典型例とされている。松本市宮河本村遺跡では竪穴住居が144軒検出され、出土土器に弥生時代後期以降の形式もみられることから、長期間継続した大規模集落とされる。後期の松本平では塩尻市で遺跡数が増加し、丘中学校遺跡・向陽台遺跡・中扶遺跡・和手遺跡などでは集落ととも方形周溝墓もみられる。

### (3) 古墳時代

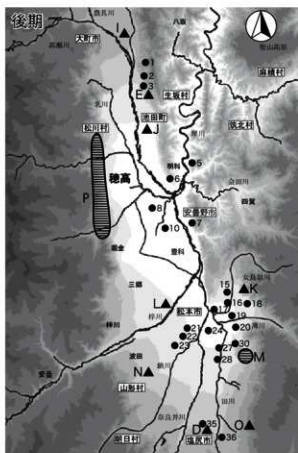
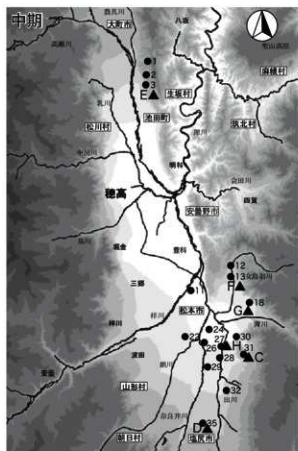
古墳時代前期・中期・後期の松本平の集落遺跡は大町市周辺、安曇野市周辺、松本市周辺、塩尻市周辺の大きく4つの地域に分布し、各山麓に古墳が営まれている(第5図)。

#### 大町市周辺

借馬遺跡、来見原遺跡、中城原遺跡などがある。このうち借馬遺跡は鹿島川扇状地末端にあり、弥生時代後期から中近世にかけての大集落遺跡である。この遺跡からは竪穴住居址が検出され、土師器や須恵器が出土した。この遺跡はかなり広範囲で、水害などのない場所に点々と集落を形成しており、遺跡の全域に住んでいたわけではないと考えられる(大町市教育委員会編1980～1985)。来見原遺跡は、旧石器時代から中近世まで通して長期間続いた大規模な遺跡である。来見原遺跡の西側を流れる農具川の流域はかつて湿地帯に近い状態であり、まず弥生時代の人々が開拓し、水田とした場所と推測される。そして段丘の縁に近い微高地は居住区として利用された。遺跡が農具川に沿った地区に集中するのが大町市における特徴であり、この現象は中世にまで及ぶ(同編1988)。中城原遺跡は高瀬川によって形成された館の内段丘面に位置する。この遺跡は9基の周溝墓と5基の木棺墓、4基の古墳と4基の土坑墓が検出されたことから、弥生から古墳時代にかけての墓域、聖域であったとみられる(同編1992)。この他、小熊山の東麓から東南麓にかけて、新郷1号墳をはじめとする後期古墳が存在する。

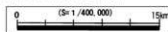
#### 安曇野市周辺

旧穂高町の馬場街道遺跡・藤塚遺跡・矢原五輪畑遺跡周辺と、旧明科町の上生野遺跡・栄町遺跡・潮神明宮前遺跡・北村遺跡に大別される。穂高古墳群と同時期に存在した集落遺跡である馬場街道遺跡からは後期住居址3軒が検出され、土師器・須恵器、長頸壺、鎌、刀子が出土した(穂高町教育委員会編1987)。藤塚遺跡からは後期の竪穴住居址30軒、掘立柱建物址5軒が検出され、土師器、須恵器、鎌、刀、石製紡錘車、金環が出土した(安曇野市教育委員会編2009)。また、矢原五輪畑遺跡からは勾玉が出土している。一方、明科には後期の瀬古墳群などがある。



地域名	No.	遺跡	跡生	古墳			奈良	平安
				前期	中期	後期		
大町市	1	遺跡						
	2	東野原						
	3	中城原						
安曇野市	4	上生野						
	5	廣神御成前						
	6	安野						
	7	北村						
	8	藤塚						
	9	五輪塚						
	10	鳥塚街道						
	11	平野						
松本市	12	下出口						
	13	岡田西義						
	14	岡の宮						
	15	大村						
	16	大城原						
	17	女鳥羽田						
	18	藤之内						
	19	下宮						
	20	牛島塚北						
	21	三の宮						
	22	北栗						
	23	南栗						
	24	高五						
塩尻市	25	出川						
	26	出川西						
	27	出川原						
	28	津島高						
	29	平田本郷						
	30	生栗						
	31	尚栗						
	32	白神塚						
塩尻市	33	上城沢						
	34	中城						
	35	平出						
	36	八重						

A 中山96号墳 B 弘法山古墳 C 向原古墳群 D 平田古墳群 E 中城原古墳群 F 梨ヶ丘古墳  
 G 針塚古墳 H 平田宮古墳群 I 小島山車庫古墳群 J 鬼の塚古墳 K 杉島山古墳  
 L 安曇野古墳群 M 中山古墳群 N 南村古墳群 O 新ノ神古墳群 P 藤高古墳群



第5図 松本平の古墳時代集落と古墳

## 松本市周辺

松本市周辺の古墳時代の集落遺跡は女鳥羽川周辺、薄川周辺、奈良井川周辺、田川右岸、田川左岸に集中的に展開する。女鳥羽川周辺には女鳥羽川遺跡・岡田西遺跡・下出口遺跡がある。女鳥羽川の周辺では古墳時代から平安時代までの集落遺跡が多数確認されている。

薄川周辺には下原遺跡、千鹿頭北遺跡がある。下原遺跡は松本市東部の里山辺地区にあり、薄川扇状地の扇尖に位置する。ここでは古墳時代後期に集落が突然出現し、奈良時代まで生活が営まれていた。ここからは掘立柱建物址12軒、竪穴住居址26軒が検出され、土師器、須恵器、鉄製品、馬具、紡錘車が出土した（松本市教育委員会編1993）。松本盆地の東端である鉢伏山の山麓にある千鹿頭北遺跡では、古墳時代後期の住居址が大量に検出され、遺物は土師器、須恵器を中心に出土した。竪穴住居址は古墳時代後期を中心に古墳時代前期、奈良、平安の各時代のものが総数66棟発見された。そのうち古墳時代後期のものは40棟になる（同編1989）。

奈良井川周辺には梓川によって形成された扇状地に展開し、奈良井川左岸に位置する水田地帯一帯を範囲とする北栗遺跡、南栗遺跡、三の宮遺跡がある（長野県埋蔵文化財センター編1990ほか）。この地域は高立条里的遺構とされ、遺構や遺物の密集する地域である。北栗遺跡は7世紀後半になって竪穴住居址が水源近くに出現し、遺跡全体に開発の手が及ぶのは奈良時代に入る頃の8世紀初頭である。三の宮遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の集落が確認されている。

田川右岸には向畑遺跡、生妻遺跡がある。向畑遺跡は複合遺跡であるが、多数の住居址がまとまって確認でき、古墳時代前期の竪穴住居址が57軒確認されている（松本市教育委員会編1990）。

田川左岸には出川南遺跡、出川西遺跡、高宮遺跡がある。前期から存在する出川南遺跡では、住居址、竪穴状遺構、掘立柱建物址などの遺構が検出され、土師器、須恵器を中心に紡錘車、砥石などの石製品、玉類、鎌などの鉄製品が出土している（同編1994ほか）。古墳時代中期にあたる高宮遺跡は、土器を用いた祭祀遺構が確認されている。この遺構からは正位におかれた高杯、逆位に置いたミニチュア（手捏ね）土器や土製品、多種多様の玉類、石製模造品類、鉄鍔などの鉄器類が大量に出土した。土器集中区からは初期須恵器や土師器が出土しており、これらは意図的に置き去られた状況が窺えるため、祭祀的な性格を有するものとして考えられる（同編1994）。高宮遺跡の南側に展開している出川西遺跡からも配石遺構や意図的に土器をまとめて置き去ったと思われる遺構が確認されることから、出川西遺跡から高宮遺跡にかけての微高地一帯が古墳時代中期において、祭祀に関わる特別な空間として認識されていた可能性がある（同編1999）。

松本平における古墳は、松本市を中心として存在する。前期古墳である中山丘陵上に位置する弘法山古墳は、長野県内最古の古墳とされており、3世紀末に築造された前方後方墳であり、中山36号墳は4世紀前半に築造された円墳である。中期古墳である桜ヶ丘古墳は桜ヶ丘丘陵に位置する円墳である。針塚古墳は、薄川の右岸縁辺部の薄町から荒町一帯に分布する古墳時代後期が中心の積石塚古墳群の一角に位置するが、5世紀後半に築造された円墳である。後期古墳である妙義山古墳群は、1号墳とその西北と西南に隣接して築造された2基の陪塚的な小型の円墳の3基から成り立っている。中山古墳群は松本市の中山丘陵にある古墳群で73号墳まで確認された。古墳の築造時期は、6世紀前半から7世紀末、8世紀前半に比定され、この間200年にわたって古墳の築造や、被葬者の供養が行われていたと考えられる。

## 塩尻市周辺

平出遺跡、下境沢遺跡、中挾遺跡がある。松本盆地南東部に位置する東山山麓には有数の遺跡密集地帯で、田川に流れ込む群小の河川により形成された扇状地には、旧石器時代から古代までの遺跡がみられる。塩尻市内では調査された古墳時代遺跡は少なく、竪穴住居址の検出された遺跡をみると平出70軒、中挾10軒、和手9軒、下境沢2軒、竜神平2軒、久野井1軒となっている（塩尻市誌編纂委員会編1995）。そのうち平出遺跡は奈良井川扇状地上にあり、東西1km、南北300m～400mにわたる広さ15haの集落遺跡で、土師器や須恵器などが大量に出土した（平出遺跡調査会編1995、塩尻市教育委員会編2005・2007ほか）。平成2年度の調査では古墳時代後期の竪穴住居址4軒が検出され、土師器と須恵器、石製紡錘車、編物用石錘が出土した。また、平成15年度の調査で

は、古墳時代後期の竪穴住居址が1軒発見された。また、祭祀に関連した遺物と考えられるものとして手持勾玉、石製模造品、柄杓形土製品、土馬などが出土したことから、村のなかで頻繁に祭祀が行われていた可能性がある。平出遺跡の後方には後期の平出古墳群がある。

(伊原)

#### (4) 古 代

##### 国家形成と信濃国

7～8世紀古代の日本は東アジア情勢が激変する中で、大和政権の東進を始めた広範囲の支配が進んだ時代であった。朝鮮半島では641年に百済では義慈王が即位し、高句麗では642年に泉蓋蘇文が采留王及び諸大臣以下180余人を殺害し宝蔵王を立てて政権を握る。また新羅では642年に百済の侵略を受け存亡の危機に陥り、高句麗に救援を請うがこれを拒否したために唐に救援を求めることとなる。その後、新羅では王孫である金春秋が権力を握る。このような東アジア各国の集権の流れに大和政権も無関係ではなく、645年に中大兄皇子、中臣鎌足らが蘇我蝦夷、入鹿を殺害し権力を握る乙巳の変が起こり権力の集中化が起こった。この乙巳の変から始まる大化の改新と呼ばれる改革が始まり、中央集権国家を造る試みが始められたと考えられる(鈴木1994)。これは信濃国にとっても無関係ではなく、官道が整備され、大和政権との関係性がうかがえるものが数多く見受けられる事ができる。

徳高古墳群のある安曇野は古代において東山道に属す科野国に位置している。この科野国は伊那、諏訪、筑摩、安曇、更級、水内、高井、埴科、小県、佐久の10郡に分かれ、松本平は筑摩郡と安曇郡にわたって広がっている。この筑摩郡については『日本書紀』の天武天皇14年(685)に記述されており大宝律令以前の古い地名と考えられている。しかしこの『日本書紀』の記述を実証する史料については未発見である。また安曇郡の名前の由来は海人の統率者であったとされる安曇氏からきていたとされ、安曇野市にある徳高神社の祭神の一柱は海神である綿津見神である。

東山道は大和政権が政治上の目的を持って整備した官道であり、一定距離に一定数の馬を用意する馬家を設ける駅制が整備されていた。筑摩郡を通過する官道には覚志と錦織の駅家があり、覚志には10疋、錦織には15疋の馬が常備されていたと『延喜式』の「諸国駅伝馬条」には記されている。中央から派遣されていた国司が政務を行っていた信濃国府はその位置を示す史料、地名が存在しておらず国分寺が小県郡にあるために国府も同様に小県郡におかれたと考えられていた。しかし『日本三代実録』の記述や『和名類聚抄』巻5の信濃国筑摩郡の項に「国府」の割注がある事などから信濃国府は8世紀末から9世紀前半には小県郡から筑摩郡に移転されていたと考えられている。この信濃国府の位置は松本市惣社付近とする説である。国司は自分が任地についた時に国内の全ての神社へ参拝するという任務を負っていたが、代わりに国府の近くに社を設けて国内の神を集めて祀り、その社を参拝することでその代わりとした。この社の名を総じて惣社といい、筑摩郡の惣社という地名もそれだと考えられる。

『延喜式』には信濃国からの貢納品が記されている。それによると調としては紺布、縹布、緋革、麻布、商布を納める事になっていた。また庸はすべて麻布で納めることとなっていた。この貢納品は官物として京に運ばれるのだが、信濃から京までは往路21日、帰路10日かかる厳しい旅と言われている。これらの農民の苦勞がうかがえる史料として正倉院宝物白布に残る墨書銘を挙げることができる。これには筑摩郡山家郷の小長谷部尼麻呂が調庸布を納めたことが記されており、また平城宮から出土した木簡からは筑摩郡山家郷から勞役に服していた男に対して生活費を送ったことが分かる。

##### 牧と集落

『延喜式』には信濃国内に牧が16牧あったと記されている。その内訳としては諏訪郡3牧(山鹿牧、岡屋牧、萩倉牧)、小県郡2牧(塩原牧、新治牧)、高井郡2牧(高位牧、大家牧)、筑摩郡2牧(埴原牧、大野牧)、安曇郡1牧(猪鹿牧)、佐久郡3牧(塩野牧、長倉牧、望月牧)、伊那郡3牧(平井手牧、笠原牧、宮廻牧)である。しかし同じく『延喜式』の兵部省の条には伊那郡には牧は存在せずと書かれており、『延喜式』のなかでも牧の数、場所が異なっている。また中世の史料である『徳高社造宮帳』には猪鹿牧は徳高神社領の西側にあったと記載されており、猪鹿牧は現在の安曇野市徳高周辺に所在した牧と推定されている。大野牧は松本市和田・今井から田

波田町、山形村にかけての一带とされ、埴原牧は松本市中山の埴原に比定されている。この埴原牧の管理集落とされている小池遺跡では第2次調査までに奈良、平安時代の竪穴住居187軒、竪穴状遺構5基、掘立柱建物11棟、土壇墓1基などが確認されており、この小池遺跡は大規模集落であったことが判明している（松本市教育委員会編1997）。また小池遺跡の西に位置する一つ家遺跡からは平安時代の竪穴住居38軒、掘立柱建物1棟が確認されている（同前）。

埴原市にある吉田川西遺跡では古墳時代から平安時代に属する竪穴住居266軒、掘立柱建物8棟が確認されており、特種な出土遺物としては「椀原」や「蘇」と書かれた墨書土器が発見されている（長野県埋蔵文化財センター編1989）。「蘇」は乳製品を意味し、牛や羊などの家畜も飼育されていたと考えられる。このようなことから吉田川西遺跡は埴原牧の管理にあつた村の可能性が考えられる。松本市にある小原遺跡では遺構のほとんどが奈良時代末期から中世に属し、竪穴住居128軒、掘立柱建物9棟が確認されており、土師器、須恵器などの他に円面硯が出土しており、東山道も通っていることから、本遺跡も埴原牧の管理集落と考えられている（松本市教育委員会編1990）。集落遺跡に関しては、古代から出現する牧の管理集落などは違い、時代をまたいで存在する集落もある。松本平にある集落遺跡では借馬遺跡、出川南遺跡、生妻遺跡などは弥生時代～平安時代までの長い期間存在しており、古墳時代から古代までの遺跡では来見原遺跡、栄町遺跡、馬場街道遺跡、高宮遺跡などがある（第5図）。

#### 古代寺院

信濃における古代寺院としては、まず信濃国分寺が挙げられる。聖武天皇は741年3月に「国分寺建立の詔」を發布し、諸国に国分寺、国分尼寺の建立を進めていった。信濃国分寺跡は上田市大字国分寺仁天堂 字明神前に位置し、千曲川を南方に見る第3段丘面上に所在している。北の第2段丘面上には、古代の信濃国分寺の流れを汲む天台宗の信濃国分寺が所在し、南には官道である東山道が通っていたとされている。この信濃国分寺跡は1963年から1971年にかけて発掘調査が行われ、全容が明らかになった（上田市教育委員会編1974）。出土遺物としては瓦、土師器、須恵器、灰桶陶器、青磁、円面硯、古銭、鉄釘などである。特徴的な事柄としては僧寺、尼寺ともに完全に発掘されたことや他国の国分寺よりもはるかに僧寺と尼寺との間の距離が短いこと、加えて他国では尼寺のほうがはるかに規模が小さい例が多数であるが、信濃国分寺では僧寺と尼寺との規模があまり変わらないことなどが挙げられる。また、1967年、尼寺跡北方約200mの国道18号線沿いで東西に平行して瓦窯2基が検出された。この瓦窯の構築材として縄目や押型文の平瓦が多数使用されていることから、信濃国分寺補修用の瓦を焼いた平安時代初期の瓦窯と推定されている。また信濃国分寺跡出土瓦と同一の軒平瓦が上田市依田古窯跡群や千曲市込山廃寺から東に約400mに位置する土井の入り窯跡から出土している。

信濃国には国分寺以外にも定額寺があったことが史料から分かっている。定額寺とは貴族や豪族などが建立した私寺が律令国家の統制化に入って官寺と化し、国分寺に並ぶ鎮護国家のための寺のことである。『日本三代実録』貞観8(866)年2月2日条に、「以信濃国伊奈郡寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙楽寺、並預之定額寺」とあることから信濃国には5つの定額寺があったと考えられている。これらの一つである屋代寺は雨宮廃寺と推定されている。雨宮廃寺は雨宮坐宮神社の西側に位置し、大量の木簡が出土した遺跡である（長野県教育委員会編1968）。1962年に行われた発掘調査では礎石が検出されており、この礎石から南北2棟の建物が存在していたと考えられた。出土瓦は六葉半弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦などであり、丸瓦は行基式丸瓦である。木簡に関しては7世紀後半の層から9世紀中ごろの層にかけて126点出土し、紀年銘木簡、物部木簡、郡符木簡や木製祭祀具が大量に見られている。このように大量の木簡が雨宮廃寺から出土した理由としては、過去における数回の洪水砂によって各遺物包含層がバックされ、良い状態によって保存されたためと考えられている。これらの木簡の内訳としては国府・郡衙関係、織維工房・出挙関係、荷札など経済関係、祭祀具への墨書、軍事関係など種類が豊富である。その他の定額寺の推定所在を見てみると、伊那郡座光寺は飯田市座光妙来寺の境内ならびにその周辺とされている。筑摩郡錦織寺は松本市反町にある洞光寺が錦織寺の後身と通説では考えられているが、その根拠や所在地は不明確である。更級郡安養寺は東筑摩郡筑北村字松場

にあたる考えられているが、付近から平安時代にさかのぼる遺跡は見つかっていない。佐久郡妙楽寺は佐久市下塚原の塚原古墳群付近に妙楽寺という同名の寺が存在しているが、この寺の由来が不明なため所在地と断定できない。

これら国分寺、定額寺などの古代寺院のほかに県内最古の寺院である明科庵寺がある(原1955、明科町教育委員会編2000、桐原2002)。明科庵寺は安曇野市にあり、白鳳時代の寺院跡として知られている。明科庵寺が作られた古墳時代後期から奈良時代初めの周辺の古墳を見てみると旧明科町域には潮(金山塚)古墳群8基、明科能念寺古墳群3基、武士平古墳群2基のほか、明科上郷古墳、押野上屋敷古墳などがあり、これらの多くは6世紀以降の小規模な古墳であるが、1998年に行われた潮神明宮前遺跡の発掘調査によって潮古墳群の新たな古墳として7世紀後半から8世紀初頭の径20mの方墳が見つかり(桐原2002)、出土遺物から明科庵寺を創建した氏族の古墳の可能性が高いとされている。古代明科の地域は安曇郡前科郷の地域であったと推定されており、奈良時代の8世紀中ごろの天平宝字8年(764)に中央政府に調布として納められた麻の布袴には「信濃国安曇野郡前科郷戸主安曇部真羊調布壹端(中略)郡司主帳従七位上安曇部百鳥」とあり、安曇郡を建てた安曇氏にかかわる名前が見える。安曇氏は祖神である綿積三神を祭る志賀海神社のある現在の福岡市周辺が禊野の地といわれており、海業を本業とする古代の有力氏族であり、大王の内膳司として大和政権でもかなり高い地位にあったことを考慮すると、明科庵寺は安曇氏の氏寺として建立された可能性が高いとされる。1999年の発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、瓦類が発見されているが、ごく一部しか調査されておらず、金堂や塔などといった寺の核心部分は発見されていない。出土遺物としては軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、瓦塔、土師器、須恵器、灰軸陶器、金属器などである。瓦塔は、屋根、壁体、隅肘木、基壇の破片、水煙の一部が出土し、基壇の形状から八角形の塔とみられている。出土した瓦は滋賀県大津市衣川庵寺、岐阜県飛騨市の寿楽庵寺、山梨県甲斐市の天狗沢瓦窯跡から類例が出土している。

古代における信濃国は大和政権が行った律令の整備、中央集権化によって変化をしていくが、古墳時代からの流れを汲んでいることは、集落が連続して営まれていることや明科庵寺から知ることができ、牧が複数存在することや安曇氏が海業を本業としていたことなどから流通や交易が盛んであり、中央政権や他の地域との交流も多かったのではないかと考えることができる。(森)

### 第3節 穂高古墳群と周辺の古墳

#### (1) 穂高古墳群

本学では、従来の語文文献を検討した結果、穂高古墳群を以下のように整理した(國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

1. 「穂高古墳群」は『信濃史料』(信濃史料刊行会編1956)において分類されたA群～D群、『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』(長野県教育委員会編1968)において分類されたE群～G群、『穂高町の古墳』(穂高町教育委員会編1970)において分類されたH群、『長野県史』(河西・松尾1984)において旧穂高町域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳によって構成される。
2. 従来古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」という語については、A群～D群までを指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の2通りの意味をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含まない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。
3. 単独墳については現在までの研究上の習慣やG1号墳(上原古墳)のように周辺に未知の古墳が存在している(していた)可能性(穂高町教育委員会編2001)を考慮して古墳1基のみで構成されていても「群」とする。
4. A群～G群は穂高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、古墳群全体を示す「穂高古墳群」と各支

群との間で習慣上・便宜上用いられてきた「有明古墳群」「西穂高(牧・塚原)古墳群」などの名称は用いない。

5. 各支群を構成する古墳の総数は『信濃史料』(信濃史料刊行会編1956)以降「所属支群を示すアルファベット・通し番号」の表し方で文献上に確認できたものを総数として報告した。また穂高古墳群全体を構成する古墳の総数は各支群の総数の合計に比べ、「所属支群を示すアルファベット・通し番号」の表し方で文献上では確認できないが以前に文献上で存在が確認されているもの(例:狐塚第4・5号古墳)を考慮して「87基以上」とする。

以下、上述の諸文献や各報告書をもとに支群ごとに概要をまとめておく。

**A群** 宮城地区に位置するA群は、4基が現存し、最も高い場所にA1号墳があり、800mから1100mほど下った夫婦岩地籍に残り3基がある。昭和39年(1964)の穂高町教育委員会による悉皆調査では、本群中には8基が存在していたとして煙滅し去った4基を欠番としている。A1号墳は陵塚といい、墳丘、石櫛などはほぼ完全な状態で残っており、天井には11枚の花崗岩がのり、側壁、奥壁は自然石で囲まれている(岩崎・松尾・松村1983)。穂高町の古墳中最もよく保存されているものの一つで、大正14年(1925)に黒史跡として指定されたという標柱が残っている。副葬品としては馬具・土師器・須恵器(埴瓶・埴・杯)などが出土している。A6号墳は犬塚塚といい、墳丘は上部がなく周囲だけが僅かに残っている。石室は自然石で囲まれ、北壁の全てと南壁の一部、奥壁が崩れかけたまま残っており、天井石はない。直刀・玉類・金環など多数の出土があったといわれ、有明神社に土師器(杯)、須恵器(横瓶・高蓋)が残されている(岩崎ほか1983)。A7号墳は塚塚といい、墳丘は周囲だけ残っているが天井石はなく、石室は奥壁のみほぼ完全に保存されており、東西の側壁は下部だけが残っている。

**B群** 四ヶ塚、小岩岳地区に位置するB群は、乳房川が西の山麓から離れたところから東へ1600mまでの間、川の兩岸に沿って36基が造られている。構成状態は、B1号墳を核とする群とその東方の列在する12基である。B1号墳はぢいが塚といい、墳丘は半ば崩れ天井板は5枚残っている。入口右側壁は長さ3m近い自然石を使用し、石室内は高さ約1.5mと大人が立って歩けるほどである。天井が高いのは旧穂高町ではここだけであり、石室内はほぼ完全に保存されている。B3号墳は連塚といい、墳丘は径15m、高さ2.3mで半ば崩れ、天井石は中央2枚が完全に保存され前後2枚が石室内に落ちている(岩崎ほか1983)。石室はほぼ完全に保存されている。B5号墳は金堀塚といい、墳丘が僅かに残り、石室は露出している。旧安曇郡誌には出土遺物(人骨・金環・直刀・玉類・須恵器など)多数ありと記載されているものの所在不明である(太田1923)。B13号墳は、墳丘がほぼ残り、その径は12mで規模は大きくないが陵塚と共に破壊されていない古墳の一つである。B23号墳は祝塚といい、墳丘は半壊状態である。石室は僅かに残るが、土が入り詳細不明である。天井石は1枚南端に残っており、土師器・須恵器(埴瓶・高杯など)が有明神社に保存とされるが分類不明により未確認である。

**C群** 富士尾地区に位置するC群は、山麓をやや入った富士尾沢兩岸に沿い、墳丘7基が発見されている。大型石室を持つ古墳は無く、いずれも径10m高さ1m前後の中・小規模の円墳で、石室は横穴式である。C1号墳の石室は長さ7.2m、高さ0.9m、幅は下方部で1.4mである。

**D群** 中房川左岸に位置し、通称「魏石鬼窟(魏磯城窟・魏石岩窟とも表記される)」で知られる1基をさす(鳥居1925、宮坂1922)。他の古墳群と異なり無墳丘古墳であり、露頭する花崗岩の巨石一枚を天井石として利用して、石室の西側及び奥壁には板状石を用いている。石室は長さ7.2m、高さ1.3m、幅は入口から3mのところまで1.45m、奥壁付近で2.45mとなっている。昭和42年(1967)の分布調査では、北安曇郡松川村鼠穴の古墳を含めD群として扱っていた。昭和61年(1986)に石室内調査が行われ、馬具片6・鉄鏃3・金環1・不明鉄器片1・須恵器9点が発見されており、魏磯城窟古墳の成立年代を6世紀末に限定しその後約1～2世紀にわたって追葬がなされたことや、修験者の修業の跡が確認されている(三木・寺島・西山1987、三木1990)。

**E群** 鳥川・川窪川に挟まれている台地の東縁である牧地区に位置するE群は、14基で構成され、扇状地一面に散在とした形で分布している。E1号墳は西牧塚といい、墳丘僅かに残り、石室の石らしい大石が一部露出しているものの詳細不明である。墳丘上に祠がある。E3号墳は十三屋敷西古墳といい、E群中最も高い地点に1



基のみで見えられた。墳丘は僅かに残り、石室の南側は石積みがはっきりしている。北側は崩壊し天井石らしき石1枚が陥没している。E2号墳は三郎塚といい、径14m、高さ1.4mの墳丘中に長さ2m、幅1.3m、高さ1.2mの長方形玄室が残り、土師器・須恵器が出土している。E6号墳は狐塚3号墳といい、径20m、高さ3.6mでE群中最大規模である。明治44年(1911)に発掘された古墳がこれに該当するとされ、当時の記録から、直刀数本・鈔(銀象嵌鍍金)・刀装具・槍・鉄鏃・馬具・勾玉・管玉・切子玉・金環・青銅製劍・須恵器甕・横板・蓋などが出土したとされている(太田1923)。E7号墳は狐塚2号墳といい、昭和26年(1951)大場磐雄らによって調査され、墳丘の径15m、高さ2mで、無袖式石室(長さ2.25m、幅2.1m、高さ1m)が内蔵されており、玄室は前室と後室に分かれ、前室から直刀・鈔・鉄鏃・刀子が発見されている。羨道部からは金環が出土している(藤沢1968)。E10号は寺島塚といい、E11号の僅かに東南方にあり、墳丘は僅かに残り、直刀・勾玉など出土した。古墳前に寺島仲間の祠があり、樺の大木が立っている。

**F群** 塚原地区に位置するF群は、柏原沢の右岸、標高605mから650mの間に列在している。F群はほとんどが破壊されており詳細は知ることはできないが、10基の墳丘規模だけは分かり、大小5基ずつ二つのグループに分けられる。最末期の墳丘とみられ、内部主体はF1号・F6号墳が石室を地表面下に作ったもので最末に位置する。1975年にF1号墳(一本松古墳)の発掘が行われた(中島1976)。F8号墳は旧矢原沢の凹地に沿い古墳跡はないが地元住民は古墳跡と伝えている。付近から須恵器片・短刀の出土例があったという。F9号墳とF10号墳は二ツ塚といい、F9号墳は墳丘上に巨石が散在し、諏訪社の古い祠があったが現在はなくなっている。F10号墳は墳丘の径10mほどで封土も残り、天井石6枚と側壁4段積みがはっきり出ている。F群中もっとも保存状態がよい。

**G群** 上原地区に位置する上原古墳1基をさし、F群の東方上原地帯の水田中に立地している。出土品の鬘が六花形鏡板付であることから6世紀後半までに造られたとされており、昭和5年(1930)に猿田文紀氏らにより調査された(猿田1931・1933)。墳丘は存在せず、松本市安塚古墳と全く同じ構造の石室は全長10.1m、玄室長8.1m、羨道長2.0mである。側壁は野面石4段〜5段積み、奥壁は1枚石を立てた上に2段〜3段積んでいる。床面には砂利敷き詰められており、出土遺物は勾玉8・管玉1・切子玉2・小玉2・金環2・九曜文鏡板を付けた鬘一式・杏葉・直刀・辻金具・飾金具・刀子・須恵器などがある。他の古墳は円墳横穴式であるがこれだけ竪穴式古墳といわれる。

**H群** H1号墳である耳塚1基のみでの構成であり、塚上の祠を大塚様といい昔から耳の神様として地域に知られている。旧郡誌では魏石鬼八面大王にまつわる塚であるとするが、新郡誌では古墳としておらず、盛土ではあるものの詳細不明としている。

**松川村所在古墳** 安曇野市の北側、松川村に所在する祖父が塚古墳と牛窪古墳、桜沢オカメ塚の3基の単独墳からなる。祖父が塚古墳が1879年・1880年ごろに、牛窪古墳が1892年頃に発掘されたとされる。1983年12月の筑波大学による祖父が塚古墳の墳丘と石室の実測調査の結果、穂高町内に分布する古墳との石室構造の類似性が指摘され(岩崎ほか1983)、翌年の『長野県史』ではこれを踏まえて穂高古墳群を構成する古墳の一つとして扱っている。

(参考)旧堰金村所在古墳 穂高古墳群を構成する可能性のある古墳が旧堰金村内に存在する。現在、須佐渡口古墳・岩原古墳・前の髪古墳・曲尾古墳群・古城下古墳が確認されており、うち須佐渡口古墳と岩原古墳については位置的な関係と立地条件から、F群を構成する古墳の一部とも考えられる。

## (2) 周辺の古墳

松本平には現在、300基以上の古墳が確認されている(第1表)。

前期古墳は数が少なく、また、長野県内最古の古墳とされる松本市の弘法山古墳が大規模な前方後方墳である他は大規模なものは見当たらない。弘法山古墳の内部施設は竪穴式石室であり、石室は長さ5.5m、幅1.32m、高さ0.93mで、石室外側には幅1.6m〜2.05mにわたる外被施設が設けられている。副葬品には舶載鏡の半三角縁四獣文鏡や鉄鏃、東海地方や近畿地方からの搬入品と思われる土器が出土しており、被葬者が当時の松本平にお



第6図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡

安曇野市教育委員会2010をもとに作成。A2・A4・A5の位置は藤澤1963による。B14・B26・E15・E16・E18・E19の位置は不詳。なお、高瀬川を挟んだ対岸の池田町にも数基の円墳が存在するが、本図には示していない。

ける中心的存在であったことや周辺地域との交流の様子などが窺える(弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編1978、松本市教育委員会編1993)。同じく松本市の中山36号墳(径20m、無石椁)もこの時期の古墳としては代表的である。ここからは、文様の表出や銘文などが弘法山古墳出土鏡と近似する六獣文鏡が出土している(原・小松1972、原1984)。このことからこの2基の古墳の被葬者は同じ系譜上にあることが窺える。

中期に入ると全国的に前方後円墳が多く出現し長野県でも例外なく現れるが、松本平には1基も確認されておらず、松本市の桜ヶ丘古墳(径18m)や開き松古墳のように円墳が主流のままである。桜ヶ丘古墳は甲冑(長方板革綴短甲)などの武器・武具類のほか金銅製天冠が出土しており(本郷村教育委員会編1966、松本市教育委員会編2003)、また、同じ松本市の開き松古墳では眉庇付冑が出土している(桐原1996)。中期の副葬品も前期同様、剣1口が納められた埴丘墓的な性格をもったものが多く、眉庇付冑や天冠はたんなる装身具の一つではなく、着装者の社会的地位を示すものでもあるため、大和政権からの下賜品とみなされている。4世紀後半から5世紀前半にかけて築造された古墳は松本市では発見されていないなど、この時期は松本平全体においてもあまり古墳は造られていなかったと思われる。5世紀後半以降には、現在の松本市を中心に幾つかの古墳群が造られはじめる。また、松本市の針塚古墳のように積石塚の早い築造例が中期の後半頃にみられ、副葬品として舶載内行八花文鏡・鉄斧・武器・馬具・須臾器が出土している(松本市教育委員会編1991)。

松本平の古墳は後期に造られたものが多い。墳形は円墳が多くなり、大きさも前期や中期に比べて小さくなっている。代表的なものとして大町市の新郷1号墳があり、南北径12m、東西径10.5mの円形の積石塚である。積石塚は渡来系の文化を示すものともいわれている。石室の長さは8m、幅は南側の羨道で1m、北側の玄室部分で1.5m、石室の高さは1.5mで、副葬品には、太刀・鉄鎌・刀子・轡・碧玉製管玉・金環・ガラスなどの丸玉・土師器・須臾器が出土している(原田1985)。池田町の鬼ノ釜古墳は7世紀初頭から中葉にかけてのものと考えられ、長方形の無袖式をとり、側壁が自然石の乱積みによって構成されている。出土遺物としては、7世紀初頭に比定される須臾器破片(雲・横紋)が検出され、伝承では鉄刀・金環・勾玉とあるが、後世の盗掘により散逸してしまい不明である(池田町教育委員会編1977)。松本市の妙義山古墳群の2号墳は6世紀後半から7世紀にかけて造られたとされるが、一種の竪穴式石室の構造で、床面の深さは約1.2mあるものの、単に石室床面を区画しただけの簡単な工法であり、石室内が長さ約6.3m、幅約1.5mであるなど、依然として竪穴式石室を内部施設にもつものも存在する(本郷村教育委員会編1966、原1984)。その他にも後期古墳の特徴としては松本市の中山古墳群のような古墳群の形成があげられる。中山古墳群は、明治時代には80基以上が残されていた古墳群であり、2008年の段階で73号墳まで確認されている。築造年代は弘法山古墳と中山36号墳を除き、多くは6世紀後半から7世紀に比定されているが、早いもので5世紀後半頃、遅いものでは8世紀前半頃のものも確認されている(松本市教育委員会編2008)。旧明科町の瀬古墳群は2005年の調査までに8基の円墳が確認されており、現在は田、墓地、道路などその面影を残してはいないものの、横穴式石室を有し、また直刀、刀子、轡、金環、勾玉、須臾器などが出土していることなどから、7世紀末から8世紀初頭に築造されたものと推察されている(明科町教育委員会編2005)。後期においては武器、武具、馬具、装身具が多くなっている。全国的にこの時期には土師器・須臾器が大量に出土しているが、松本平においても土師器や須臾器は杯・高杯・壺などが特に多いことから全国的な中・後期古墳の特徴と一致している。また、松本平では金属器も多く出土しており、金属器では鎌・刀子などの生活必需品が多い。大町市の小熊山東南麓古墳群では直刀・刀子・鉄鎌・轡・金環・ガラス小玉・土師器・須臾器など多量に遺物が出土している。

その他に8世紀の事例ではあるが、松本市の安塚古墳群の8号墳からは石室内で火を使った形跡があり、焼かれた人骨が出土していることから、石室が火葬施設として利用された可能性を示している(松本市教育委員会編1979)。

(日原・坂倉)

第1表 松本平の古墳一覧(1)

大町市		かね塚	詳細不明
社口	円 径4 高1/直刀	法眼塚	円 径10 高1
大笹	円 径11 高2/鉄剣/5世紀後半	京塚	詳細不明
あま池1号	円 径7 高2.5 木棺直葬	五輪塚	円 径12 高2.5
あま池2号	円 径7 高1 木棺直葬	<b>松川村</b>	
あま池3号	円 径7.5 高1.5 木棺直葬	牛窪	円 径15 高3 石室:長7 幅2 高2/玉類
あま池4号	円 径7 高1 木棺直葬	桜沢オカス塚	円
かしわくずれ1号	円 径23 高2	祖父が塚	円 径16 高2.53 石室:長8.1 幅1.9~2.4 高1.9 /岩崎ほか1983
かしわくずれ2号	円 径8 高1	藤塚	円 径8 高2
かしわくずれ3号	円 径13 高1	<b>安曇野市(旧徳高町)</b>	
来見原1号	円 径20 高3.5 木棺直葬/刀子	徳高A1号(陵塚)	円 径16×14 高21 石室:葺子板・持送り 長(奥)0.6(玄)7.6 幅(奥)0.5(玄)1.8 高(奥)0.6(玄)1.2/馬具・須恵器・土師器/岩崎ほか1983
来見原2号	円 径8 高1 木棺直葬	徳高A2号	円 径推4
来見原3号	円 径13 高1 木棺直葬 外部半壊	徳高A3号	円 径推7 石室:長推定4・幅推定1
来見原4号	円 径6 高0.5 木棺直葬	徳高A4号	円 径10.8×7.4
来見原5号	円 径5 高1 木棺直葬	徳高A5号	円 径6.6 高0.6
来見原6号	円 径4 高0.5 木棺直葬	徳高A6号(犬糞塚)	円 径13 高18 石室:径1 幅1.5 高1.1/岡田1983
山の神	円 径13 高2 木棺直葬/土師器(来見原古墳群)	徳高A7号(鼠塚)	円 径14 高1.6 石室:長8.3 幅1.2~1.5 高1.1
中城原1号	円 土師器/大町市教委編1992/6世紀前半	徳高A8号	詳細不明
中城原2号	円 土師器/大町市教委編1992/6世紀前半	徳高B1(祖父塚)	円 径推 高30 石室:葺子板 長2.9~3.8 幅0.9~2.5 高2.0 断面形持送/岩崎ほか1983
中城原3号	円 須恵器・土師器/大町市教委編1992/5世紀末~6世紀初頭	徳高B2号	円 径10 高2.1 断面形持送
中城原4号	円 須恵器・土師器/大町市教委編1992/6世紀前半	徳高B3号(連塚)	円 径15 高2.2 石室:長6.4 幅1.1~1.7 高0.9
尻無1号	円 径9×7 高1.6 (小熊山東南麓古墳群)	徳高B4号	円 径15.2 高2.7 石室:長10.2 幅1.7 高2.3
尻無2号	円 径10.4 高1 (小熊山東南麓古墳群)	徳高B5号(金堀塚)	円 径15.7×12 高1.5 石室:長6 幅6 高1.5/須恵器・鉄鏡・金環・玉類・直刀/太田1983
尻無3号	円 横 内部長6 幅1 (小熊山東南麓古墳群)	徳高B6号	円 径16 高8 石室:長5.6 幅1.2~1.4 高0.8
新郷1号	横石円形 径3×10.5 高1.5 横/直刀・刀子・鉄鏡・馬具・金環・管玉・小玉(ガラス・滑石・土)・須恵器・土師器(小熊山東南麓古墳群)	徳高B7号	円 径8.4 高0.8 石室:長5.1 幅1.4 高0.8
新郷2号	円 径6.5 高1 (小熊山東南麓古墳群)	徳高B8号	円 径8.3 高0.8 石室:長5.2 幅1.4 高0.8
新郷3号	円 径8.5 高1.3 (小熊山東南麓古墳群)	徳高B9号	円 径9.6 高0.9 石室:長6.0 幅1.3~1.8 高0.9
新郷4号	円 径8 高1 横(小熊山東南麓古墳群)	徳高B10号	円 径18.0×14.8 高1.8 石室:平面形・持送 長9 幅1.4~2.4 高1.5
鬼穴	円 径 高5/直刀・管玉/7世紀中頃(小熊山東南麓古墳群)	徳高B11号	円 径9 高5 石室:長9 幅1.5 高0.4
狐穴1号	円 径5 高2/須恵器/6世紀後半~7世紀(小熊山東南麓古墳群)	徳高B12号	円 径推定8 高推定1.5 石室:長1.6
狐穴2号	円 径 高1.3/6世紀後半~7世紀(小熊山東南麓古墳群)	徳高B13号	円 径12 高1.7 石室:長5.5 幅1.1~1.7 高0.9~1.2
久保山1号	径20 高1.6 木棺直葬	徳高B14号	円 径11 高1.5 石室:長7.6 幅1.5~1.8 高0.8
久保山2号	円 径14.5 高1.6 木棺直葬	徳高B15号	円 石室:長7 幅1.5 高1.5
狐久保1号	円 径15 高1.3 木棺直葬	徳高B16号	円 径11 高1.3 石室:長5.5 幅1.3~1.8 高1.0
狐久保2号	円 径6 高1.3 木棺直葬	徳高B17号	円 径18×14.8 高1.8 内部:長5.5 幅1.5
<b>大町市(旧美麻村)</b>		徳高B18号	詳細不明
センボ塚1号	円 径6 高1.2	徳高B19号	円 径9 高5
センボ塚2号	円 径5 高0.4	徳高B20号	円 径推8 高推1.5 石室:長推4
モンボ塚3号	円 径5 高0.8	徳高B21号	円 径12 高1.7
<b>大町市(旧八坂村)</b>		徳高B22号	円 径11 高1.5
双牛塚1号	円 径5 高1	徳高B23号(祝塚)	円 石室:長4 幅1.3/直刀・馬具・金環・勾玉・切子玉・須恵器・土師器/岩崎ほか1983
双牛塚2号	円 径6 高1.1	徳高B24号	円 径11 高1.5 石室:長5.5
双牛塚3号	円 径5 高1	徳高B25号	円 径6.5 高1.5 石室:長5 幅1.5
双牛塚4号	円 径6 高1.4	徳高B26号	円
双牛塚5号	円 径6 高1.7	徳高B27号	円 石室:長7 幅2
<b>池田町</b>		徳高B28号	円 径14.3 高1.3 石室:長4.8
鬼の釜	円 径11 高2 石室:長4.8 幅2 高1.9/刀子・須恵器/池田町教委編1977	徳高B29号	円 石室:長8.5 幅1.5
糖塚	円	徳高B30号	円 石室:長4.5 幅1.25
宮下	円 径10 高1.6	徳高B31号	円 石室:幅1.1 高0.6
石矢塚	円		
万海塚	詳細不明/直刀?		



第1表 松本平の古墳一覧(3)

水波1号	積石円形/直刀・髷・玉類	向畑6号	円 径16/須恵器・土師器/松本市教委編1988/中興
水波2号	積石円形/原1971	向畑7号	円 径22/須恵器・土師器/松本市教委編1988/中興
水波3号	積石円形	中山1号(向畑2号)	円 径18 高2 無石槨/鉄剣・刀子・鹿角製槨尻 宮坂1930
水波4号	積石円形/須恵器	中山2号(向畑3号)	円 径14 高1 横/長野県史刊行委員会1981
塚山1号	円 径27~32/須恵器・玉類・鉄剣/松本市教委編2005/5世紀	中山3号(向畑4号)	円 径9 高2 横/長野県史刊行委員会1981
塚山2号	円 径15/須恵器/松本市教委編2005/5世紀	中山4号(向畑5号)	円 径14 高1.2/長野県史刊行委員会1981
塚山3号	円 径14/須恵器/松本市教委編2005/5世紀	中山5号	円 径16 高2.5 無袖
本社峯	円 石室:長3 幅1 高1.7	中山6号	円 径15 高1.5
桜ヶ丘	円 径18 高1 室内部長2.5 幅1.5 高1.2 須恵器/金銅刀・髷・刀子・鉄剣・鉄鏃・鹿角製刀・短甲・銅鏃/玉類/松本市教委編1996/7世紀末~6世紀前半	中山7号	円 径14 高1.5
飯沼洞	円	中山8号	円 径17 高2
横谷入	円 剣・直刀・勾玉・髷	中山9号(坪ノ内経塚)	円 径12 高2
茶臼山	円 無石槨	中山10号	円 径17 高2
御殿山	円	中山11号	円 直刀・鉄剣
妙義山1号	円 径35 高4 土師器/本郷教委編1966	中山12号(西越1号)	円 径10 高2.5 横
妙義山2号	円 径18 高2 室内部長2.3 幅1.5 高1.2 須恵器/金銅刀・髷・刀子・鉄剣・鉄鏃・鹿角製刀・短甲・銅鏃/玉類/松本市教委編1996/7世紀	中山13号(西越2号)	円 径5.5 高1.5 横
妙義山3号	円 径18 高2 室内部長2.3 幅1.5 高1.2 須恵器/金銅刀・髷・刀子・鉄剣・鉄鏃・鹿角製刀・短甲・銅鏃/玉類/松本市教委編1996/7世紀	中山14号	円 径10.5 高1
桃仙園	円 甲冑・直刀・剣	中山15号(楸形原1号)	円 径13 高2 石室:長4.8 幅1.8 高1.8/玉具
大屋敷	円 直刀・玉類・髷	中山16号	円 径15 高1.5 高1.4~1.8/須恵器・土師器/松本市教委編2003/7世紀末~8世紀前半
国司塚	円 径11 高1.5	中山17号	円 径15.5 高1.5 玉類・銅鏃・須恵器・土師器
車塚	円	中山18号(楸形原4号)	円 径23 高1 横/桐原1980
塚山	円 径7 高2/鉄剣・鉄鏃・玉類	中山19号(小山下)	円 径12 高3
猫塚	円 径12 高2	中山20号	円 径9 高2
松岡1号	積石方形 須恵器	中山21号	円 径12 高1.5
松岡2号	積石方形 直刀	中山22号	円 径12 高2.3
松岡3号	積石方形 径5	中山23号(小丸山)	円 径15 高3/松本市教委編1991/6世紀後半~7世紀
松岡4号	積石方形 径12	中山24号(丸山)	円 径12 高2
里山辺1号(荒町)	積石方形 径22 高2	中山25号	円 径13 高3
里山辺2号(大塚1)	積石方形 径18×4.5 高1.7/松本市教委編1990	中山26号	円 径8.5 高3
里山辺3号(大塚2)	積石方形 径15	中山27号(和泉八幡山)	円 径23 高5
里山辺4号(針塚)	積石方形 径15/内行花文・刀子・鉄剣・玉類・銅鏃・須恵器・土師器/松本市教委編1991/5世紀後半	中山28号(弥生山1号)	円 径6 高1.5
里山辺5号(御母家1)	円 径15 高2 石室:長5 幅2 高1	中山29号(弥生山2号)	円 径6 高2
御母家2	詳細不明	中山30号(生妻1号)	円 径21
里山辺6号(丸山)	積石円形 径9.8×9.4 石室:長6.2 幅0.4~1.3/鉄刀・鉄鏃・耳環・玉類・銅鏃・須恵器・土師器/松本市教委編1993/6世紀	中山31号	円 径14 高2.6
里山辺7号(山田入)	円	中山32号	円 径10.5 高4
里山辺8号(藤井1)	円 径27 高1.7 横 内部幅2.7 高1.7	中山33号	円 径12 高4
里山辺9号(御符)	円 径18 高3 横	中山34号	円 径13 高4.5
里山辺10号(巾上)	円 横	中山35号	円 径3 高3/4世紀
里山辺11号(北河原屋敷)	方 径22 高3 横	中山36号(仁能田山)	円 径20 高1.5 柱土室/平三角上方非穴状 無石槨・鉄剣・土師器・原・小石1972/4世紀
里山辺12号(上金井)	円 径3.6 横 内部幅1.2	中山37号	円
里山辺13号(人穴1)	円 径6 高1.5 横 内部長2.5 幅1.5 高1	中山38号	円 径12×14 高1.5 石室:長7.1 幅1.5/須恵器・土師器・武器・玉具
里山辺14号(人穴2)	円 横	中山39号	円 石室:長5.1 幅1.3/須恵器
里山辺15号(藤井2)	円 横 内部幅1 高1	中山49号	円 径11 高15×12/松本市教委編2003
里山辺16号(古宮)	積石円形 径5 高1.5 横	中山50号	円 径13 松本市教委編2003
里山辺17号(猫塚)	積石円形	中山51号	円 径7~8 松本市教委編2003
南方	円 径12 石室:長6 幅2~1.6/直刀・刀頭具・鉄剣・武器・金環・玉類・須恵器・土師器・銅鏃・木炭・鹿角製/松本市教委編1990/7~8世紀	中山52号	円 径11×9 石室:長10.5 幅6/松本市教委編2003
入山辺1号	円 石室:長2.3 幅1.8 高0.8	中山53号	円 径15×4.5 石室:長11.7 幅7/松本市教委編2003
入山辺2号	円 石室:長3 幅2 高0.8	中山54号	円 径9 高1 石室:長3 幅1.7/須恵器 土師器 磨 刀子 ガラス玉/松本市教委編2003
向畑1号	円	中山55号	円 径11×10 石室:長11 幅1.5~1.6/玉類・鉄剣・刀子・釘・須恵器・土師器/松本市教委編2003
		中山57号	円 径11×8 石室:5.2 幅1.2~1.5/須恵器/松本市教委編2004

第1表 松本平の古墳一覧(4)

中山61号	円 石室：長2.1 幅1.4/須恵器/松本市教委編2008/7世紀末	安塚4号	円 径 内部長5 幅0.9 高0.2/須恵器・土師器・人骨/松本市教委編1979/8世紀前半
中山62号	円 第1室宮：長2.6 幅0.9+1.5 第2室宮：長2.6 幅2.5-3.5/須恵器/松本市教委編2008/7世紀末	安塚5号	円 横 平面形無袖 内部長8.4 幅1.7 高0.4/直刀・刀装具・鉄鏃・金環/松本市教委編1979/8世紀前半
中山63号	円 径6.1以上×4.5程度/須恵器・土師器/松本市教委編2008/7世紀末～8世紀	安塚6号	円 横 平面形無袖 内部長8.1 幅1.8 高0.7/須恵器・土師器・人骨/松本市教委編1979/8世紀前半
中山64号	円 石室：長2.6 幅1.4/刀子/松本市教委編2008	安塚7号	円 横 内部長3.5 幅1.1 高0.5/須恵器・土師器・人骨/松本市教委編1979/8世紀前半
中山65号	円 石室：幅0.5/須恵器/松本市教委編2008/8世紀前半	安塚8号	円 径11 横 平面形無袖 内部長7.3 幅1.3 高1/直刀・銅等金具・金環・勾玉/松本市教委編1979/8世紀前半
中山66号	円 石室：幅1.7/須恵器/松本市教委編2008/7世紀末	安塚9号	円 横 内部長2.2 幅1.5/須恵器/8世紀前半/松本市教委編1979
中山67号	円 水晶原石/松本市教委編2008	大塚	円
中山68号	円 石室：幅1 /松本市教委編2008	柏木	円
中山69号	円 石室：幅1.1 /須恵器/松本市教委編2008/8世紀初頭～前半	<b>塩尻市</b>	
中山70号	円 石室：幅4.8 /松本市教委編2008	彌ノ神1号	二次形形 径 高1.5 石室：長4 幅1.7 高1.0/人骨・金環・玉類・直刀・刀子・鉄鏃・馬具・須恵器・土師器/塩尻市教委編1986/8世紀後半～7世紀前半
中山71号	円 径8 石室：長12 /松本市教委編2008	彌ノ神2号	円 径13×11 高0.75 石室：長6 幅1.25/金環・玉類・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器・土師器/塩尻市教委編1986/6世紀後半～7世紀前半
中山72号	円 松本市教委編2008	彌ノ神3号	円 径18.5/勾玉・刀子・銀糸・須恵器/塩尻市教委編1986/6世紀後半～7世紀前半
中山73号	円 内部長7.4 幅4/松本市教委編2008/8世紀初頭～前半	小丸山	詳細不明
坪ノ内1号	円 鉄鏃・馬具	柿沢	詳細不明
坪ノ内A号	円	鍋中	詳細不明
坪ノ内B号	円	堀ノ内	円 径5 高0.8
坪ノ内C号	円	大塚	円 鉄剣
坪ノ内D号	円	小塚	円
板立	円 径5.5 高2.5/西沢市草文鏡・直刀・銅種柄頭・鉄鏃・馬具・金環・玉類・土師器	中鉄	詳細不明
蟹畑	円 径7 高1 /宮坂1930	狐塚	円 径10 高2 石室：長5.0 幅2.5/瑪瑙勾玉・須恵器
西越	円 石室：長5.45 幅1.51/鉄鏃・骨鏡器	塚田の塚	円 直刀・鐮・金環・勾玉
千石	円	記常塚	円 /直刀・馬具・玉類
坂上	円	銭宮1号	円 径10 高2
栄殊院裏1号	円	銭宮2号	円 径9 高2/須恵器
栄殊院裏2号	円	長田前	円 径15 木棺直葬/鉄剣・土師器
日向原	円	大塚	鉄剣
柏木	円 径7 高1 石室：長3.8 高2.7 幅2.2 高2.1 差込1.2/直刀・鉄鏃・馬具・玉類・金環・銅環・須恵器・土師器/桐原1962	糠塚	円 径18×22 高3.7～5/塩尻市教委編1978
中洞下	円	塩尻町7号	円
平林	円	平出(宗賢)1号	円 径19 高3 内部・長5 幅2.5/鉄剣・刀子・鉄鏃・土師器・灰椀陶器/大塚・亀井1957
棺渡山1号	円 径18 高1.8 無石椁/桐原1970	平出(宗賢)2号	円 径10 高2/直刀・短刀・刀子・鉄鏃・馬具・金環・玉類・須恵器・土師器/6世紀中葉
棺渡山2号	円 径14.5 高1.6/骨・直刀・鉄鏃・6孔瓦石/桐原1970	平出(宗賢)3号	円 径12 高0.6/鉄剣
棺渡山3号	円/直刀 鉄剣	宗賢4号(大塚)	円 径8 高0.3/鉄剣・土師器
中山北尾根1号	円 無石椁/刀子	千人塚	円 径18
中山北尾根2号	詳細不明	コイド5号	円 径18 高5
中山北尾根3号	詳細不明	石塚	詳細不明
耳塚	円	本表は表中の報告書および下記文献をもとに作成した。 大町市：大町市教育委員会編1988、旧穂高町：國學院大學文学部考古学研究室編2010、旧堀金村：堀金村誌編纂委員会編1992、旧明科町：明科町教育委員会編1994、塩尻市：塩尻市誌編纂委員会編1996、その他の町村村：長野県編1981	
坂下1号	円 径20 高5		
坂下2号	円 径12 高1.5		
坂下3号	円 径10 高0.7		
坂下4号	円 径15 高3.5		
平瀬権現堂	円		
老根田	円 径13 高1.5		
生妻2号	円		
立石	円		
安塚1号	円 横 内部長1.2 幅1 高0.8/人骨・須恵器/松本市教委編1979/8世紀前半		
安塚2号	円 横 内部長1.2 幅1 高0.8/須恵器・人骨/松本市教委編1979/8世紀前半		
安塚3号	円 横 内部長3 幅2.5/人骨/松本市教委編1979/8世紀前半		

## 第四章 穂高古墳群F 9号墳の調査

### 第1節 調査地の概要

昨年度から調査しているF 9号墳は、穂高古墳群F支群内の古墳の一つである。立地は西側のF10号墳と共に烏川扇状地のほぼ扇頂部。北緯36°19'08"、東経137°51'29"で、地籍は安曇野市穂高柏原3653にあたる。現在はF10号墳と共に、国営アルプスあづみの公園掘金・穂高地区の敷地内に所在する。

かつて墳頂部に諏訪神社の祠が存在しており、鳥居の礎石跡と考えられる直径5cmほどの穴が空いた大きな石が見られる。現在祠は無く、取り壊された時期は不明であるが、1970年の時点では祠の存在は確認されている(写真図版1:穂高町教育委員会編1970)。国営アルプスあづみの公園の建設前はF 9・10号墳間に穂高町の上水場水源池(塚原配水池)があり、それにより両古墳は少なからず削平を受けている可能性がある(第7図)。公園建設の際、水源池は移設されたが両古墳は現状保存された。

F 9号墳の2009年度の測量調査の結果は、直径17.0m、高さ1.32mであった。主軸は概ね南北にとり、N-14.5°-Wである。墳丘の保存状態は良いとは言えず、北東側は旧状を留めているが、南西側においては工事のために削平をうけ、石室部分も崩落している。

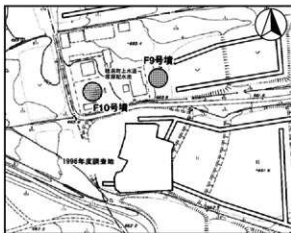
### 第2節 調査の方法

本調査では、F 9号墳の発掘調査を行った。まず、昨年度と同様に調査前写真の撮影および墳丘の除草作業を行った。公園内の敷地であるため慎重に行い、草は地表面から約5mmの部分で芽切りをし、落ち葉を取り払った。

除草作業完了後に墳丘の全体撮影を行い、第Iトレンチは石室の範囲の確認、側壁の状況確認、羨道の位置を解明する目的で、光波測距儀を使用して墳丘の主軸に沿って設定を行った。トレンチの範囲は墳頂部から南に10m、幅1mである。1m×1mのグリッドをA1からA10まで設定した。

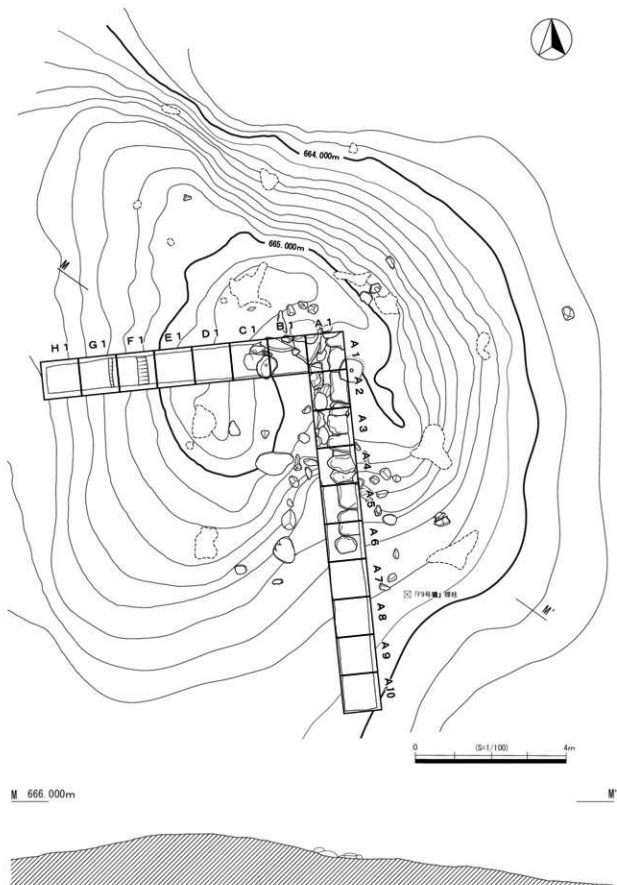
設定後、各グリッドに一人ずつ入り掘り下げを行った。遺物が発見された際に、出土地点のわかる遺物については光波測距儀を使用して出土地点を記録した。取り残した遺物が無いように剥がした土の篩作業も並行して行い、釘や土師器片などの細かい遺物や取り逃した遺物を見逃さないように注意した。第Iトレンチを2層まで掘下げた時点でトレンチ全体、グリッド写真は2グリッドずつ、セクション写真は1グリッドずつ写真撮影を行い、分層を行った。F 9号墳の標柱頂部(標高666.784m)を基準点とし、水系の設定をし、実測者、記録者の二人一組に分かれ、各組2グリッドずつ平面図、土層断面図の作成を行った。

第IIトレンチは周溝の確認と墳丘の層序の確認を目的に、光波測距儀を使用して墳丘の主軸とほぼ直角に設定を行った。墳頂部から西に10m、幅1mである。Iトレンチ同様、1m×1mのグリッドをA1グリッドと接して、B1からH1まで設定した。第Iトレンチと第IIトレンチはA1グリッドで交差している。当初は墳頂部から東に向けて設定する予定であったが、調査の段階で第Iトレンチの東側から石室の側壁が発見されたため、西側の石室側壁の確認と後世の削平規模の確認のために第IIトレンチの設定を墳頂部から西側へと変更した。



第7図 F 9号墳と旧塚原配水池 1:2,000  
(長野県埋蔵文化財センター編1997を改変)





第8図 F9号墳2010年度調査区

本来の盛土である黒色土まで掘下げる予定であったが、黄色土を剥がす段階で現代遺物が見つかり、削平が確認された。G1、H1グリッドで層が変化したので、平面的に精査した。第Ⅱトレンチも第Ⅰトレンチと同様に標柱を基準点とし、平面図、土層断面図の作成を行った。B1グリッドは礫が多く散乱しており、一部実測が不可能であった。実測時の縮尺は1/10であったが、本報告書では1/50で作成している。

### 第3節 第Ⅰトレンチ

#### (1) 調査の経過

除草作業完了後、光波測距儀を使用して第Ⅰトレンチの設定を行った。発掘作業と並行し、篩による遺物確認作業も行った。第Ⅰトレンチには全体的に木の根が多く入っており、更にA1～A6グリッドには木の根のほか、石室に使用されたと思われる石材が並んでいたため作業は難航した。掘り進めて行くうちに、今までの黒色土層とは異なった性質の層が見えたので、この層を2層として掘り下げられるところまで掘り下げた。A1～A6グリッドからは大きな割石が出ており、A7～A9グリッドには大きな石はなかったものの、径10cm程度の割石が多く出ている。古墳時代の遺物はA6～A9グリッドから多く出土しており、近代の硬貨はA1～A6から出土した。割石が多く、これ以上掘下げが出来なくなった所で清掃をし、平面図・土層断面図の作成を始めた。縮尺は1/10で記録した。第Ⅰトレンチ東側は割石が邪魔になり石室の測量が困難であったため、墳丘の現状の堆積状況を記録するために西側の土層断面図を作成した。

(浅海)

#### (2) 基本土層

1層：黒色土層(Hue 5Y black黒2/1よりも明るい)。小石を多く含み、木の根が蔓延る腐食土層である。

砂質は軟らかく、パウダー状である。しまりは無く、空隙があり、密度も薄かった。粘性は無く指で擦ってもまとまらない。

2層：土層(Hue10YR 黒褐3/2)。後世の攪乱層である。小石や礫を多く含んでおり、木の根も多く蔓延る。

砂質はパウダー状であるが、第1層よりも少し硬い。しまりは1層と比べると少しだけあるが、空隙があり、密度も薄かった。粘性は無く、指で擦ってもまとまらない程度である。

土質は1層・2層ともパウダー状であり、2層は若干しまりがある。両層とも木の根が多く蔓延り、空隙があり、密度も薄い。本墳の所在する国営アルプスあづみの公園建設に伴う発掘調査の際に、調査地の土層から「表層腐食質ポク土層」が確認されており(長野県埋蔵文化財センター編1997)、1層・2層はそれに対比されると考えられる。今回検出された1層・2層は出土遺物から後世の攪乱を受けていることが判明し、古墳築造の際に用いられた土でない。

(北澤)

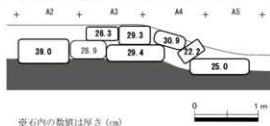
#### (3) 石材

第Ⅰトレンチ東側から割石と思われる二段に重なった石材を13点、西側から2点確認した(第9図)。石室は石で埋められており、下まで掘り出す事ができなかったため、2段目までの確認となった。東側の上段の石材は5点確認され全て小口積である。厚さは平均して30cm程で、種類は全て花崗岩である。崩れている石が見られる。下段の石材は7点確認され、小口積である3点を除きほとんどが平積みである。厚さは平均して30cm～40cm程で、種類は上段同様ほとんど花崗岩であるが、砂岩系の堆積岩が1点確認された。天井石は確認されなかった。全て掘りきっていないため断言は出来ないが、主軸とほぼ並行に一直線に並び、意図的な組み方をしているため、羨道の側石と考えられる。

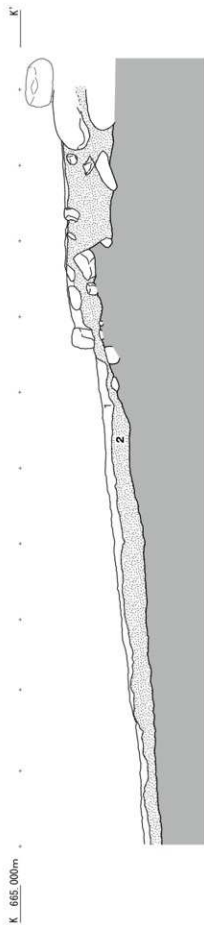
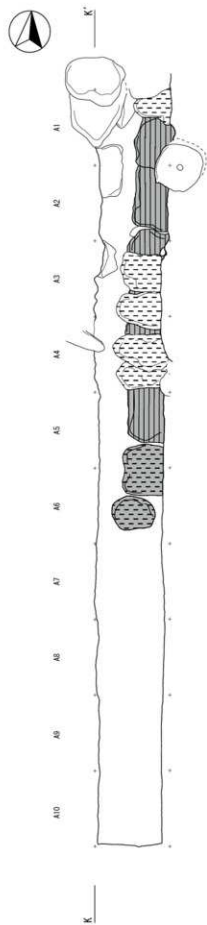
(浅海)

#### (4) 出土遺物

今回の調査では土師器片12点、須恵器片7点、和釘4点、硬貨等金属12点、近代陶器片1点が検出された。須恵器片は、全点実測と写真撮影を行ったが、土師器片に関しては



第9図 F9号墳石室側石模式図



凡例	
□	1層
▨	2層
+	グリッド境界
□	上段
▨	下段
■	小口積
▨	平積



第10図 第Iトレンチ平面図・断面図

1点を除き小破片であり実測は行わなかった。

**須恵器**(第11図1～5・図版21-1～5)

**<フラスコ形長頸瓶口頸部>**(第11図1・図版21-2)

胴部との接合部分に頸部成形のロクロ回転方向に対して垂直に入る痕があるため、フラスコ形長頸瓶の頸部だと考えられる。口頸部は軽く弓状を呈し、口縁部に近くなるにつれ大きく外反する。残存高10.5cm、口径9.4cmで、焼成はよく、色調はHue10 4/1 灰である。胎土には砂粒、砂礫、黒色微粒子、白色微粒子がみられる。器面調整はまず、粘土紐をロクロミズビキ成形した後、内外面共にナデによる調整が行われている。内外面の一部には自然軸がみられる。頸部に二条の沈線が施され、口縁部は折り返されている。A 8 グリッド 2 層出土。

**<肩 部>**(第11図2・図版21-3)

須恵器壺の肩部と考えられる。残存高は4.8cmであり、径は約17.2cmである。焼成はよく、色調はHue 5 Y 6/1 灰である。胎土には砂礫、砂粒、黒色微粒子がみられる。器面調整は、ロクロ成形を施した後、内外面とも横方向のナデによる調整が施されている。外面に自然軸が掛っているが、部分的に剥離している。また、外面下部に叩き目が見られる。A 9 グリッド 表土層出土。

**<蓋杯蓋>**(第11図3・図版21-4)

杯蓋である。残存高3.35cm、口径推定13.2cmである。焼成はよく、色調はN 3 暗灰である。胎土には砂礫、砂粒、白色微粒子、黒色微粒子が見られる。器面調整はロクロミズビキ成形の後、外面上部は回転ヘラ削りによって整形されている。内面はロクロナデ。A 9 グリッド、A10グリッド出土層位から出土し、接合。

**<甕胴部>**(第11図4・図版21-5)

甕の胴部破片で、残存高は5.5cmである。胎土には砂粒、白色微粒子、黒色微粒子が見られ、色調はN 5/1 灰である。器面調整はタタキ成形が行われた後、内外面ともナデによる調整が行われている。A10グリッド 2 層出土。

**<甕胴部>**(第11図5・図版21-1)

大型の頸部に近い甕の胴部である。また、傾き具合から甕と推測される。残存高は7.2cmである。胎土には砂粒、白色微粒子、黒色微粒子がみられ、色調はHue10 Y/1 である。器面調整は平行タタキによる成形後、内外面ともナデによる調整が行われている。内面には少し凹んだ部分があり、表面のきれいな石をタタキの際に当具として用いたと考えられる。A 8 グリッドの2層から出土。

**土師器**(第11図6・図版21-6)

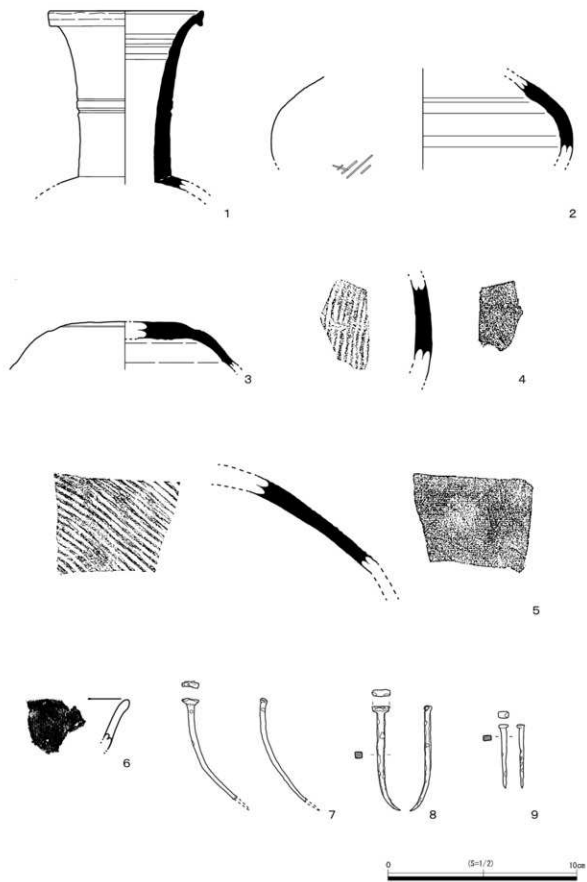
残存高は2.7cm。焼成は普通であり、色調はHue 5 YR5/6 である。胎土には雲母、輝石、砂礫、砂粒、白色微粒子、黒色微粒子がみられる。小破片のため断定はできないが、おそらく甕の口縁部であろう。A 9 グリッド 2 層出土。

**釘 類**(第11図7～9、図版22-10～12)

いずれも近代の和釘であるが、いつの時代のものかは不明である。

**硬 貨**(図版22-1～9)

今回出土した硬貨は合計9枚であった。その内訳は十銭硬貨2枚、五銭硬貨1枚、一銭硬貨3枚、一円硬貨3枚である。十銭硬貨は明治25年鑄造(写真図版21-1)のものと、昭和16年鑄造(同2)のものであり、五銭硬貨は明治25年鑄造(同3)、一銭硬貨は一部剥離していたためはつきりと分らなかったが、明治6年～17年の間に鑄造(同4)されたものである。他の一銭硬貨は昭和18年(同5)、昭和19年鑄造(同6)のものであった。一円硬貨は昭和30(同7)、昭和32(同8)、昭和34年鑄造(同9)のものであった。いずれもAグリッド1層出土。(北澤)



第11圖 F 9号墳出土遺物実測圖

## 第4節 第Ⅱトレンチ

### (1) 調査の経過

発掘作業は第Ⅰトレンチ同様、2層までの確認を基本的に行った。しかし、後述のように、大きな石が散在していたため、2層まで掘り下げられなかった部分もある。Bグリッドでは石室石材の一部と考えられるような大きな石の下にさらに割石を含む石が入り込んでいたため、掘り下げを断念した。大型の石は一部を除き原位置から移動しているものと思われる。同様にC・D・Eグリッドにも後世に盛られたと考えられる大きな石のために、掘り下げが行えなかった部分がある。割石はEグリッドまで確認され、それ以降のグリッドには礫が主に見られ、石質がB～Dグリッドと異なる。E～Hグリッドからは現代の鉄片、ケーブル、ビニールなどが確認されたため、その時点で掘り下げを中断した。このうち、Gグリッドについては、2層以下の確認のために、一部掘り下げを行ない、東壁面に3層～6層(第12回、図版19-2)を確認した。2層はまだ続いていると考えられるが、今年度の調査では確認を終えず終了した。

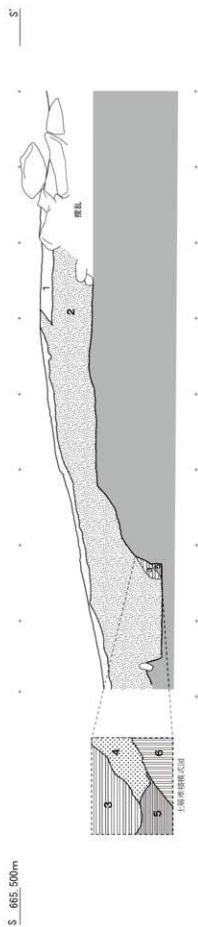
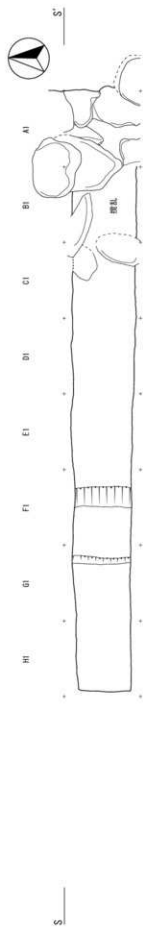
### (2) 基本土層

- 1層：黒色土層(Hue 5 Y2/1よりも明るい)。小石を多く含み、木の根が蔓延る腐食土層である。砂質は軟らかく、パウダー状である。しまりは無く、空隙があり、密度も薄かった。粘性は無く指で擦ってもまとまらない。
- 2層：黒色土層(Hue10YR 黒褐 3/2)。後世の攪乱層である。小石や礫を多く含んでおり、木の根も多く蔓延る。砂質はパウダー状であるが、第1層よりも少し硬い。しまりは1層と比べると少しだけあるが、空隙があり、密度も薄かった。粘性は無く、指で擦ってもまとまらない程度である。
- 3層：黒色土層(10YR2/1)。粒径は非常に細かく、パウダー状である。また径1mm程度の砂粒を若干含む。粘性はなく、指で擦ってもまとまらない。しまりは弱いが、空隙はなく、密度は濃い。細かいひげ根が多く混入している。径1mm未満の白色粒子を少量含む。径10cm程度の亜角礫と亜円礫を含む。断面の観察からではあるが、礫より黒色土の方が割合的に多い。
- 4層：灰黄褐色土層(10YR4/2)。粒径は非常に細かく、パウダー状で、やや極細粒の砂粒が含まれる。粘性はなく、指で擦ってもまとまらない。しまりは弱いが、空隙はなく、密度は濃い。細かいひげ根が多く混入している。径1mm未満の白色粒子が極少量含まれる。径5cm程度の亜角礫と亜円礫をやや多く含む。上位の3層より礫の割合が大きくなる。
- 5層：黄褐色砂礫層(2.5YR5/3)。極細砂を主体とするが、パウダー状の砂も含む。粘性はなく、擦ってもまとまらない。しまりは弱いが、空隙はなく、密度は濃い。細かいひげ根が混入し、断面左下にはやや太めの根が入り込む。径1mm未満の白色粒子が極少量認められる(3層・4層より少ない)。径3cm程度の亜角礫と亜円礫を多く含む。また径1mm～4mmの炭化物を少量含む。
- 6層：にぶい黄色砂礫層(2.5YR6/3)。砂の粒径は上位層より大きく細砂であり、パウダー状の砂が少ない。粘性はややあり、指で擦ると若干まとまる程度である。しまりは弱いが、空隙はなく、密度は濃い。細かいひげ根が混入するが、上位層より少ない。径3mm～5mmの小礫が割合的に多く含まれ、ほかに径5cm程度の亜角礫と亜円礫を多く含む。全体的に礫は角が取れた亜円礫が多い。

土質は上位層がパウダー状の粒径で、下位層に行くにつれ砂質が強くなる。礫の内容も、3層は10cm程度の礫を含み、4・5・6層では砂と共に径3cm～5cm程度の礫を含むようになる。また土層に対する礫の割合も、4層で増え、5・6層では主体的となる。さらに各層で言えることは、土層中に隙間がなく、詰まっている様相を示すことである。層の堆積の順番は、6層が堆積し、5層が6層を切るように堆積し、その上に4層、そして3層が全体を覆いかぶさるように堆積している。4層は3層と下位の砂礫層との漸移的な様相を呈する。

公園建設工事に先立ち行なわれた、F9号墳の約50m西側で行われた発掘調査では、上層から「表層腐食質黒ボク土」層、褐色の腐食と砂礫を含む層、砂礫層が確認されている(長野県埋蔵文化財センター編1997)。今回検出した3層が「表層腐食質黒ボク土」層、4層が褐色の腐食と砂礫を含む層、5・6層が砂礫層に対比されようか。

(大久保・北澤)



第12図 第Ⅱトレンチ平面図・断面図

## 第V章 2010年度調査の成果と考察

### 第1節 2010年度調査の成果と課題

今年度は、F9号墳の古墳の内部状況の発掘調査を行った。第Iトレンチと第IIトレンチの2本のトレンチを設定し、第Iトレンチでは石室・羨道部の幅・高さ・長さの計測を目的とし、第IIトレンチでは石室側壁の把握と周溝による古墳の範囲、墳丘堆積状況の確認を目的とした。

調査の結果、第Iトレンチ東側から石室の側壁と思われる二段に重なった石材を確認し、数点の遺物を確認することができた。石室の範囲は、石室全体の発掘が終了していないため不明である。石材は自然石を使用しており、ほとんどが花崗岩で1点のみ砂岩系の堆積岩であった。積み方は上段が小口積、下段がほぼ平積となっている。石材の大きさは約50cm～65cm、厚さは30cm～40cm程度である。羨道は今年度の調査では確認できていない。第Iトレンチでは表土層である1層、大小の礫で構成される2層を確認した。2層の礫は石室を埋め立てた際のものであると考えられる。その時期は分かっていないが、一銭硬貨や十銭硬貨がA1・A2グリッドの落ち込み部分から出土していることから近代に入ってからのものであると考えられる。

第IIトレンチ全体に黄色土と礫による攪乱が見られ、特にGグリッドからHグリッドは上水場水源池(原原浄水池)による削平が予想以上になされていた。そのため墳丘の高さ、大きさ共に築造当時とは大きく異なることが判明した。G1グリッドでは3層～6層の土層を確認することができたが、現調査深度よりも攪乱が深く、それよりも下位の土層堆積状況は未確認である。また、このため周溝は確認できなかった。

遺物は須恵器片7点、土師器片12点、近代の陶器片1点、釘4点、硬貨等金属12点出土している。土器片の年代は出土した破片で判断することは難しいが、長頸瓶の年代は7世紀中葉と思われる。硬貨はA1・A2グリッドから多く出土している。

来年度以降は、引き続き石室の掘り下げを行い、内部構造を明らかにすることと周溝の確認を行い当時の墳丘の規模を把握することが課題となる。

(浅海)

### 第2節 穂高古墳群における石室の検討

この節では、次年度以降の石室調査にむけて、岩崎卓也氏・松尾昌彦氏・村松公彦氏らの調査成果(1983:A1号墳・B1号墳・祖父が塚古墳)と中島豊晴氏の調査成果(1976:F1号墳)を参考に、穂高古墳群で石室の保存状態が良いものとF9号墳の比較をし、類似点及び相異点を見出す。

#### A1号墳(陸塚古墳)(第13図1)

墳丘規模は長径16m、短径14m、高さ2.1mの円墳で、主軸はS1°Wをとり、南方向に開口する羽子板形の横穴式石室を有する。石室の規模は石室長8.14m、玄室長7.5m、玄室幅1.8m、玄室高1.22m、羨道長0.56m、羨道幅1.28m、羨道高0.6mである。石材には花崗岩の転石が多く使用されているが、一部に割石も認められ、割石は入口部に多い。これらの石材を乱石積みし、持ち送り式の様相を呈している。石材の大きさは不揃いで、奥壁中央のものが最も大きく45cm×60cmほどである。石間には適宜15cmほどの詰石を使用している。本墳は土砂の流入のために基底の石は不明であるが右側壁では5段が乱石積みとされ、奥壁から2m～3mのところでは15cm×50cmほどのやや小ぶりの石材が使用され、それ以外では30cm×75cmほどのものが使用されている。左側壁もまた基底は未検出で、現時点で壁体は4段の乱石積みであり、石材の大きさは25cm×40cmほどから40cm×120cmほどまでが使用される。天井石は12個であり、奥壁近くでは幅80cmほどの石材が入口部に近づくに連れて幅110cmとやや大きめなものを使用している。開口部付近では閉塞石の一部と考えられる石材が見つまっている。



### B 1号墳(ぢいが塚古墳) (第13図2)

長径36m、短径25m、高さ2.5mの円墳で、主軸はS3°Wをとり、南方向に開口する無袖の横穴式石室を有する。本墳は土砂の流入が激しく、築造当時の床面は露出していないため石室高は不明である。石室の規模は石室長8.76m、玄室長4.1m、玄室幅2.8m、奥壁部の幅2.26mである。奥壁は高さ1.94m、下端幅2.46m、上端幅0.94mで腰石が2個確認されている。その腰石の上に30cm×80cmほどの石材を横積みにし、隙間には10cm～20cmほどの詰石を多数用いている。右側壁は見かけの大きさと高さ180cm、長さ556cmの巨大な自然石をそのまま用いて、天井石が直接その上に乗せられている。その他の部分では2個の腰石の上に4段に石材が横積みされているが、石材の大きさが不揃いなために必ずしもその通りではない。石材の大きさは40cm×40cmほどから70cm×140cmほどのものと様々であり、詰石も奥壁のものとは比べて大きい。左側壁の腰石は3個が確認され、自然石が4段に横積みされている。自然石をそのまま使用しているために、丸みを帯びた形状の石材が多く、空いた隙間に多くの詰石が使用されている。石材の大きさは50cm×60cmほどのものが多い。天井石は現状では5個確認されるが、石室内に落ち込んでいるものに天井石と思われる石材があるため、築造当時は6個あったものと考えられる。

### 祖父が塚古墳(第13図3)

径16m、高さ2.53mの円墳で、主軸はS11°Wをとり、南方向に開口する羽子板形の横穴式石室を有する。石室の規模は石室長8.14mである。幅は奥壁部で1.9m、中央の石室横断面で2.4m、側壁端部で1.3mである。奥壁は高さ1.85m、下端部幅0.93mで、腰石が2個確認されている。これらの腰石の上に30cm×75cmほどの石材を5段に横積みしている。石材の大きさは上のものほど小さく、やや持ち送りしている。右側壁の基底は不明であるが、現時点では20個の石材が確認されている。そのうえに6段、乱石積みされており、奥壁に比してかなり乱雑であるが、石材の大きさは比較的揃っており、40cm×70cmほどのものが多い。左側壁の基底は18個で、右側壁よりも大きいものが認められる。石積みは奥壁付近では比較的整然と6段に積まれているが、開口部に近づくに連れて乱石積みとなる。石材の大きさもかなり不揃いで、60cm×90cmほどのものから20cm×40cmほどのものまで認められる。このため、多数の詰石が使用されるが、右側壁に比して少ない。両側壁とも若干の持ち送りが認められる。天井石は4個が残存しており、隙間に小礫を詰めている。石材は奥に近いものほど大きなものが使用されており、奥の1個は幅1.4mを超えるものと思われる。なお、石材は花崗岩の自然石が使用されている。

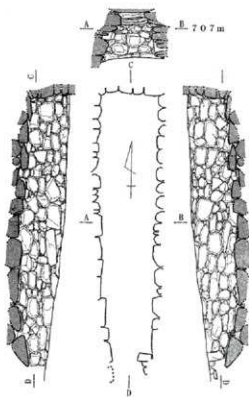
### F 1号墳(第13図4)

墳丘はかなり破壊が進んでいるために規模の推定は難しい。主体部は主軸をS14°Wをとり、南方向に開口する無袖の横穴式石室で、規模は石室長約5.6m、幅は奥壁部で約1m、中央部で約1.6m、入口付近で約1.1mである。石材は花崗岩の自然石で、大きさは拳大のものから50cm×70cmほどのものと不揃いである。それらを乱石積みにして、やや持ち送りの様相を呈する。壁高は天井石が取り去られているために正確な高さは不明であるが、1.25mほどと思われる。奥壁から約2.8m南に高さ、幅ともに約1mの大きな石があり閉塞石と思われる。その周囲には間隙を埋めるために青灰色の粘土を目張りとして塗りこめられていた。また、床面には黒色土が厚さ10cmほど固められていた。

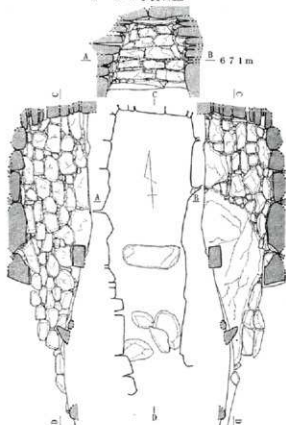
### F 9号墳との類似点と相違点

今年度の調査では達成できなかった石室全体の規模、羨道の確認は来年度以降の調査に委ねる。穂高古墳群には、内部施設として南方向に開口する無袖式プランの横穴式石室を有するものが多く、F 9号墳も同様の可能性がある。使用される石材は、花崗岩の自然石が多いものの、意図的に選択したものであるかは不明である。石材の大きさは、埋没している部分があるため大まかにしかわからないが、径50cm～60cmほどであり、穂高古墳群において特異な大きさとは認められない。また、閉塞石も発見されていない。石材の積み方は上部が小口積みで、下部が平積みであり、現時点では規則性が認められ、周辺古墳との相違点となっている。(戸田)

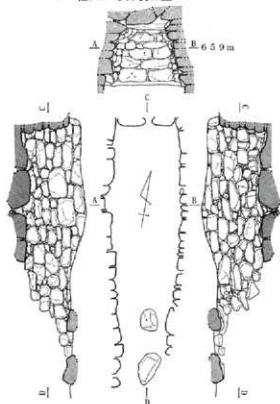
1 A1号墳石室



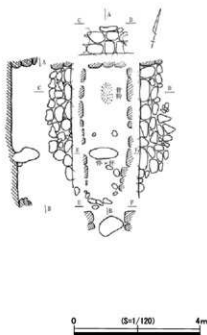
2 B1号墳石室



3 祖父が塚古墳石室



4 F1号墳石室



第13図 穂高古墳群の主要石室 (1～3：岩崎・松尾・松村1983 4：中島1976)

### 第3節 出土須恵器の検討

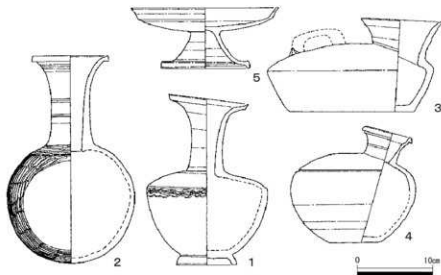
今回の調査で出土したフラスコ形長頸瓶の口頸部(第11図1)は、徳高古墳群E6号墳(狐塚3号墳)出土のフラスコ形長瓶(第14図2)と類似しており、F9号墳の築造年代と、その後の追葬が行われていた期間を考える良い資料である。

E6号墳(狐塚3号墳)は1911年6月に発掘が行われ、多数の遺物が出土し、旧帝室博物館・徳高神社・満願寺に納められた(太田1923)。その後出土遺物は1991年に『徳高町誌』編纂に際し、三木弘氏によって須恵器5点(長頸瓶2点、平瓶2点、高盤1点)、勾玉7点、切子玉16点、小玉11点、銅剣1点、馬具1組、直刀8振り(実測調査された(三木1991)。以下に示す遺物観察と考察は三木氏によって行われたものである。

「フラスコ形長頸瓶は器高二七・八cm、口径一〇・四cm、胴部最大径七・二cmを測る。口縁部は僅かに肥厚するが、上端部の突起はほとんど認められない。また口縁部直下には段がみられない。頸部には二条と一条の沈線が通っている。胴部は丸みが強い。胴部は軽くナデられているが、側辺を中心に叩き目が残っている。口縁部直下および肩部にはカキ目がみられる。また口縁部および頸部には回転ナデが施されている。焼成は良好。胎土に砂粒を多包する。暗灰色を呈する。部分的に自然釉が掛っている」「口縁部下に段を持たないが、頸部に沈線が巡らされるという点は在地的な色彩を濃く持ったものであるとし、7世紀前半でも中葉に近い年代が与えられようか」(三木1991)。

F9号墳出土の遺物には一条の沈線は巡らされていないが、上端部の突起がほとんど認められない点、口縁部直下に段がみられない点、胎土と色調の点で共通しているため、E6号墳出土品と同型式、同年代の遺物と考えられる。

また、E6号墳出土の長頸瓶(第14図1)はTK46型式からTK48型式の時期に、平瓶(同3)はTK43型式、平瓶(同4)はTK21型式に比定されるとして、これらの遺物を実年代で分けると6世紀末(同3)、7世紀前葉から中葉(同1・2)、8世紀前葉(同4・5)に位置付けられるとし(三木1991)、追葬の可能性を指摘している(三木2006)。(北澤)



PDF版修正：図中の3・4の番号が逆です

第14図 E6号墳(狐塚3号墳)出土須恵器  
(桐原1991を一部改編)

## 第Ⅵ章 おわりにあたって

國學院大學考古学研究室による長野県安曇野市穂高古墳群F9号墳・F10号墳の調査実習は昨年2009年度からの新たな試みであり、今年度の調査では古墳の内部状況と墳丘の範囲確認についての発掘調査を実施した。そのため主軸に沿って第Ⅰトレンチ(幅1m・長さ10m)を設定し、第ⅠトレンチのA1グリッドから西に第Ⅱトレンチ(幅1m・長さ7m)を設けた。第Ⅰトレンチでは石室・羨道部の側壁の幅・高さ・長さの計測を行い、第Ⅱトレンチでは石室側壁の把握と墳丘の範囲、墳丘の土壌堆積状況を確認することを課題とした。

2009年度の第1次調査ではF9号墳、F10号墳の墳丘測量図の作成と周辺地域の古墳群の現状確認調査を行い、今年度以降の発掘実習のために大きな調査基盤を作っていた。現場の状況を実際に確認してから調査を行った今年度の実習期間中は天候に恵まれてはいたものの調査地に熊が出没し、丸一日作業が行えなかったアクシデントや、今年度は実習生の人数が例年に比べて少なく、現状確認調査や当初予定していた作業を行うことができなかったことが残念に思う。今年度の調査結果としては石室の側壁と思われる大きな石、また墳丘堆積土壌から墳丘西側の大規模な削平を確認することができ、調査としては一つ先に進むことができた。

今回発掘調査に参加した実習生のほとんどは発掘調査の経験がなく、考古学調査法の授業の中で実習までの約3か月間にわたって調査に使用する機具の使い方や、図面の書き方を学んでいた。授業時間以外にも毎週土曜日には古墳時代の概要や特徴的な遺物についての基礎知識、調査地である穂高古墳群に関する勉強会を開くことで古墳時代の文化や遺物についての知識を積極的に身に付けていった。ところが、十分な知識をもって臨んだと思っていた実習では、現場の慣れない環境や実際に発掘をすることの責任感から迅速に行動をとることができず、多くのアドバイスを受けてなんとか作業を行うことができた。調査後の整理作業では、図面の作成や検出された遺物の実測など実習生自ら計画を立てて協力し合い進め、何度も原稿内容を吟味、修正をしてここに本報告書の完成を見ることができた。

今年度の第2次調査では発掘調査によってF9号墳の石室の側壁と思われる石と墳丘堆積状況を確認した。また数点の遺物が出土したが、今年度の調査結果はまだ穂高古墳群F9号墳の実態のほんの一部にすぎない。次年度以降の発掘調査では石室の全貌を明らかにし、より詳細な情報を得ることによって、穂高古墳群の研究をさらに前進させてほしいと思う。

今年の例年に類を見ない夏の猛暑の中、お忙しいところを御足労いただき、また貴重なご指摘を頂きました数多くの先生方、先輩方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

(長島)

## 引用・参考文献

- 明科町教育委員会編 1994 『長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書 明科町の遺跡』  
1991 『ほうろく屋敷遺跡』明科町の埋蔵文化財第3集  
2000 『明科庵寺』明科町の埋蔵文化財第7集  
2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ』明科町の埋蔵文化財集13集
- 安曇野市教育委員会編 2009 『三枚橋・藤塚遺跡』安曇野市の文化財第2集  
2010 『ハツ口遺跡・三枚橋遺跡』安曇野市の文化財第3集  
2010 『安曇野市埋蔵文化財包蔵地図』
- 池田町教育委員会編 1977 『鬼ノ釜古墳発掘調査報告書』
- 石部正志 1980 『群集墳の発生と古墳文化の変質』『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻、学生社、370-402頁
- 岩崎卓也 1984 『古墳時代の知識』考古学シリーズ6、東京美術  
1982 『舞鶴山1・2号墳』『腰村1号墳』『長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行委員会、333-336頁・386-391頁  
1989 『第二章 古代社会の基礎』『長野県史』第1巻、長野県史刊行会、204-286頁
- 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁 1983 『有明古墳群の再調査』『信濃』第35巻第11号、信濃史学会、32-60頁
- 上田市教育委員会 1974 『信濃国分寺 本編』吉川公文館
- 上田市立信濃国分寺資料館編 2005 『信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡』  
小穴喜一 1955 『中房川扇状地における集落の発生』『信濃』第7巻第12号、信濃史学会、39-750頁
- 小穴芳実 2002 『鳥川扇状地の開発—歴史は連続か、不連続の連続か—』『信濃』第54巻第9号、信濃史学会、655-664頁
- 大阪府立弥生文化博物館編 2001 『弥生クロスロード—再考・信濃の農耕社会—』大阪府立弥生文化博物館図録23
- 太田伯一郎 1923 『第二章第三節 遺跡(古墳)』『南安曇郡誌(旧版)』南安曇郡教育会、199頁
- 大塚考古学研究会 1964 『長野県における古墳の地域的把握』『日本歴史論究』考古学・民俗学編、文雅堂銀行研究会、57-83頁
- 大塚初重 2000 『積石塚古墳と台掌形石室』『長野市誌』歴史編 原始・古代・中世、長野市誌編纂委員会、212-231頁
- 大町市教育委員会編 1980 『借馬遺跡1』  
1981 『借馬遺跡2』  
1982 『借馬遺跡3』大町市埋蔵文化財調査報告書第6集  
1985 『借馬遺跡4』大町市埋蔵文化財調査報告書第9集  
1988 『長野県大町市遺跡詳細分布調査報告書 大町の遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第13集  
1988 『未見原遺跡Ⅱ』大町市埋蔵文化財調査報告書第14集  
1992 『中城原』大町市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 小河深美 1991 『第3章 陸水と土壌』『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会編、51-87頁
- 榎原考古学研究所編 1993 『藤ノ木古墳の全貌』学生社
- 唐沢貞治郎 1925 『ぢいか塚』『史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯、長野県・長野県教育委員会、310-311頁  
1925 『陵塚(みさゞ塚)』『史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯、長野県・長野県教育委員会、312-313頁
- 川西清光・松尾昌彦 1984 『穂高古墳群』『長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行会、219-230頁
- 桐原 健 1962 『松本市中山古墳群出土の土器様相』『信濃』第14巻第11号、信濃史学会、30-41頁  
1970 『信濃における古墳出土の鉄剣—松本市檜護山古墳出土の鉄剣を通じて』『信濃』第22巻第4号、信濃史学会、45-56頁  
1980 『松本市中山の古墳・古墳群—既掘古墳記録と中山考古資料館収蔵資料の提示』『長野県考古学会誌』第36号、長野県考古学会、22-44頁  
1991 『第二章第三節古墳時代』『穂高町誌』第2巻、穂高町誌刊行会、57-99頁  
1996 『奈良・平安時代』『松本市史』第2巻、松本市、272-298頁  
1996 『弘法山古墳の時代』『松本市史』第2巻、松本市、300-313頁  
1996 『古墳文化の発展』『松本市史』第2巻、松本市、314-325頁  
2002 『明科庵寺が提起する問題』『信濃』第54巻第12号、信濃史学会、55-61頁

- 2004 「信濃の東山道新駅にかかわる推論」『信濃』第56巻10号、信濃史学会、40-49頁
- 桐原 健・原 嘉穂 1984 「古墳と土師遺跡」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上、東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会、403-558頁
- 楠本哲夫 1996 「信濃伊那谷座光寺地区の三石室」『研究紀要』3、由良大和古代文化研究会、13-31頁
- 倉澤正幸 1999 「古代信濃における平瓦・丸瓦の変遷—上田市高田遺跡他出土瓦の検討」『長野県考古学会誌』第91号、長野県考古学会、43-60頁
- 郡司勇夫編 1981 『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社
- 弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編 1978 『弘法山古墳』松本市教育委員会
- 國學院大學文学部考古学研究室編 2010 「長野県安曇野市穂高古墳群2009年度墳丘測量調査・現状確認報告書」國學院大學文学部考古学実習報告第44集
- 小林秀夫 2006 「千曲川流域における古墳の動向—5世紀代の古墳を中心に—」『長野県考古学会誌』第82号、長野県考古学会、80-100頁
- 近藤義郎編 1952 『佐良山古墳群の研究』津山市
- 酒井潤一・仁科良夫・木村純一 1988 「松本盆地」『日本の地質4「中部地方1」』共立出版、155-157頁
- 笹沢 浩 1995 「信濃」石野博信編『全国古墳編年集成』雄山閣出版、138-141頁
- 猿田文紀 1931 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』第2年第5・6号、信濃考古学会、168-171頁
- 1933 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第14輯、長野県、長野県教育委員会、61-81頁
- 塩尻市教育委員会編 1984 『塩尻東地区県営補修整備事業発掘調査報告書—昭和58年度—』
- 1986 『榎ノ神・栗木沢・砂田』
- 1983 『丘中学校遺跡』
- 1991 『葛藤沢竪穴発掘調査報告』
- 2005 『史跡平出遺跡』
- 2007 『史跡平出遺跡』
- 塩尻市誌編纂委員会編 1995 『塩尻市誌』第2巻 歴史編、塩尻市
- 信濃史料刊行会編 1956 『信濃史料』第1巻上、信濃史料刊行会
- 重野昭茂 1991 「第1章 総論」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会編、4-8頁
- 2002 「古代矢原郷を中心とする環境と開発」『信濃』第54巻第9号、信濃史学会、695-708頁
- 2003 「鳥川扇状地の自然開発と古代開発」『信濃』第55巻第5号、信濃史学会、334-342頁
- 2007 「自然環境による安曇野古代鳥川扇状地の開発」『信濃』第59巻第3号、信濃史学会、199-219頁
- 白石太一郎 1986 「後期古墳の成立と展開」『古代の日本』第6巻、中央公論社、209-247頁
- 1973 「大型古墳と群集墳」『榎原考古学研究所考古学論叢』第2冊、93-120頁
- 1988 「伊那谷の横穴式石室(1)・(2)」『信濃』第40巻第7号・第8号、信濃史学会、1-19頁・45-55頁
- 新納 泉 1983 「裝飾付き大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号、考古学研究会、50-70頁
- 須川勝以 2001 「東海地方における後期古墳研究史」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会、3-14頁
- 鈴木靖民 1994 「東アジアにおける国家形成」『岩波講座日本通史』第3巻、岩波書店、53-87頁
- 瀬川貴文 2001 「群集墳研究の現状と課題」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会、15-26頁
- 鷹野秀雄 1890 「信濃有明村ノ古墳」『東京人類学会雑誌』第5巻52号、東京人類学会、317-319頁
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 鳥居龍藏 1925 『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣
- 中島豊晴 1976 「穂高町塚原F1号墳調査概報」『長野県考古学会誌』第25号、長野県考古学会、55-57頁
- 長野県編 1981 『長野県史』考古資料編(1)長野県史刊行会
- 長野県教育委員会編 1963 『地下に見えられた更埴市桑里遺構の研究』
- 長野県埋蔵文化財センター編 1988 『中央自動車長野県埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1—本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
- 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4

- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7—松本市内その4—南栗遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書7
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8—松本市内その5—北栗遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書8
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9—松本市内その6—三の宮遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書9
- 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14
- 1996 「大星山古墳群」『大星山古墳群北平1号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集
- 1997 『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1 穂高古墳群—近世集積遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23
- 長野市遺跡調査会編 1981 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新田遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集
- 長野市遺跡調査会編 1988 『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第30集
- 西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号、岡山史学会、154-207頁
- 仁科良夫 1991 「地形と地質」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会編、11-48頁
- 土生田純之 1996 「長野市地附山古墳群（上池ノ平古墳）について」『専修考古学』第6号、専修大学考古学会、31-43頁
- 2001 「後期古墳研究の課題」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会、303-320頁
- 2000 「積石塚古墳と合掌式石室の再検討—大室古墳群を中心として—」『福岡大学総合研究所報』第240号、福岡大学、131-154頁
- 原 嘉藤 1955 「長野県東筑摩郡明科町明科鹿寺址について」『信濃』第7巻第7号、信濃史学会、452-467頁
- 1971 「長野県水汲古墳群第2号墳」『日本考古学年報』19、日本考古学協会、162-163頁
- 1984 「中山36号墳」『長野県史』考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中信)、長野県史刊行会、259-261頁
- 1984 「桜ヶ丘古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中信)、長野県史刊行会、235-241頁
- 1984 「妙義山古墳」『長野県史』考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中信)、長野県史刊行会、242-248頁
- 原 嘉藤・小松 虔 1972 「長野県松本市中山36号墳(仁能田山古墳)調査報告」『信濃』第24巻第4号、信濃史学会、61-76頁
- 原田 曠 1985 「古墳時代」『大町市史』第2巻、大町市、133-145頁
- 平出遺跡調査会編 1955 『平出 長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究』朝日新聞社
- 藤沢宗平 1968 「古墳文化とそれ以降の文化」『南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂会、90-140頁
- 1968 「古代における集落」『南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂会、138-226頁
- 藤森森一 1939 「信濃諏訪地方古墳の地域研究史」『考古学』第10巻第1号、東京考古学会、1-55頁
- 1974 『古墳の地域的研究』永井出版企画
- 藤森孝俊 2006 「松本盆地と神城・北城盆地・姫川谷」『日本の地形5 中部』東京大学出版会、206-212頁
- 降旗和夫 2007 「地形と地質」『明科町史』自然編、安曇野市教育委員会、4-14頁
- 穂高町・穂高町教育委員会編 1989 『穂高町の古墳群とその人々』穂高町・穂高町教育委員会
- 穂高町誌編纂委員会編 1991 『穂高町誌』歴史編、穂高町誌刊行会
- 1991 『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会
- 穂高町教育委員会編 1970 『穂高町の古墳』柳沢書苑
- 1987 『穂高町矢原遺跡群（馬場街道遺跡）』
- 2001 『穂高町 一本木・神の木・宋徳寺・南原遺跡・穂高沢水系による開発、上原古墳』
- 堀金村誌編纂委員会編 1991 『堀金村誌』上巻、堀金村誌刊行会
- 本郷村教育委員会編 1966 『信濃浅間古墳』
- 松本市教育委員会編 1979 『松本市新村安塚古墳群』
- 1988 『松本市向畑遺跡Ⅰ』松本市文化財調査報告No.60
- 1989 『松本市千頭城北遺跡』松本市文化財調査報告No.69
- 1990 『松本市大塚古墳、南方古墳、南方遺跡』松本市文化財調査報告No.74
- 1990 『松本小原遺跡』松本市文化財調査報告No.86・107・123
- 1990 『松本市向畑遺跡Ⅲ』松本市文化財報告No.83
- 1991 『針塚古墳の発掘』
- 1993 『松本市山影遺跡』松本市文化財調査報告No.100

- 1993 『松本市針塚遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.102
- 1993 『松本市里山辺丸山古墳』松本市文化財調査報告No.104
- 1993 『松本市下原遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.106
- 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市文化財調査報告No.111
- 1994 『松本市平田本郷遺跡』松本市文化財調査報告No.113
- 1994 『出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』松本市文化財調査報告No.115
- 1994 『松本市高宮遺跡』松本市文化財調査報告No.116
- 1997 『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡』松本市文化財調査報告No.126
- 1999 『出川西遺跡Ⅵ』松本市文化財調査報告No.135
- 1999 『松本市平田本郷遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.138
- 2002 『出川南遺跡12』松本市文化財調査報告No.158
- 2003 『中山古墳群・楳形原遺跡・楳形原告址』松本市文化財調査報告No.168
- 2003 『桜ヶ丘古墳 再整理報告書』松本市文化財調査報告No.170
- 2008 『長野県松本市 中山古墳群14・15 カニホリ東・西遺跡—発掘調査報告書—』松本市文化財調査報告No.196
- 松本市教育委員会文化財保護課編 2005 『松本平の発掘を語る。』松本市教育委員会
- 松本盆地団体研究グループ 1977 『松本盆地の第四期地質—松本盆地の形成過程にかかわる研究(3)—』『地質学論集』第14号、日本地質学会、93-102頁
- 三木 弘 1990 『魏石鬼窟古墳を利用した修験道』『穂高町郷土資料館』第12号、穂高町郷土資料館、1-8頁
- 1991 『有明古墳群の再検討(1)』『信濃』第43巻第12号、信濃史学会、14-30頁
- 2006 『有明古墳群の再検討(2) —魏磯城窟古墳の再考を通じて—』『長野県考古学会誌』第118号、長野県考古学会、179-193頁
- 三木 弘・寺島俊郎・西山克己 1987 『長野県南安曇郡穂高町所在魏磯城窟古墳について』『信濃』第39巻第5号、信濃史学会、59-83頁
- 水野正好 1970 『群集墳と古墳の終焉』『古代の日本 5 近畿』角川書店、195-212頁
- 1975 『群集墳の構造と性格』『古代史発掘 6 古墳と国家の成り立ち』講談社、143-158頁
- 三村竜一 1997 『松本平の古瓦について』『長野県考古学会誌』第81号、43-49頁、長野県考古学会
- 宮坂光次 1922 『信州南安曇郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて』『人類学雑誌』第37巻第9号、東京人類学会、299-304頁
- 1930 『長野県東筑摩郡中山村古墳発掘調査報告書(1)・(2)』『信濃考古学会誌』第2巻第1号・第2号、信濃考古学会
- 百瀬 貢・駒澤大学自然地理研究会 1984 『松本盆地西縁、烏川流域の地形—伊藤(1983)に対する討論—』『日本地理学会発表要旨集』25、日本地理学会、8-9頁
- 向坂剛二 1964 『古墳群の群別に関する概念規定』『考古学手帳』21、塚田光、7-8頁
- 森浩一・石部正志 1962 『後期古墳の討論を回顧して』『古代学研究』第30号、古代学研究会、1-6頁
- 矢島宏雄 1990 『4 中部高地』『古墳時代の研究』第11巻、雄山閣出版、59-77頁
- 和田晴吾 1992 『群集墳と終末期古墳』『新版古代の日本』5、角川書店、325-350頁
- 2007 『古墳群の分析視角』『関東の後期古墳群』六一書房、7-32頁



---

# 写真図版

---



安曇野市長峰山からの眺望





1 F 9号墳の旧状(長野県埋蔵文化財センター編1997より転載・加筆)



2 F 9号墳の旧状(穂高町教育委員会編1970より転載)

図版 2



1 除草前全景（東から）



2 除草前全景（南から）



1 除草後全景（東から）



2 除草後全景（南から）

図版 4



1 第Iトレンチ全景(南側墳丘裾から)



1 第Ⅰトレンチ全景（北側墳頂部から）

図版 6



1 第Iトレンチ石列 (南から)



2 第Iトレンチ石列 (西から)





1 第IトレンチA1・A2グリッド側壁(西から)



2 第IトレンチA3・A4グリッド側壁(西から)

図版 8



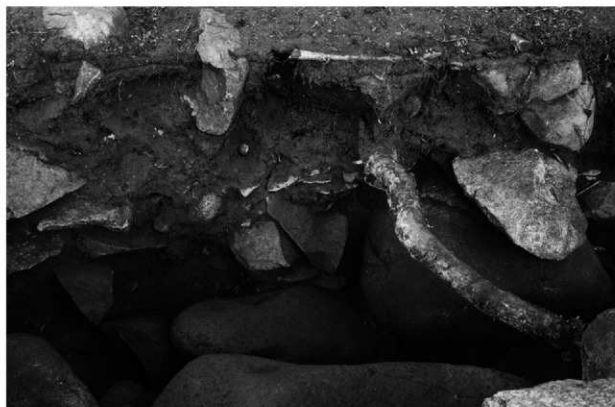
1 第IトレンチA5・A6グリッド側壁(西から)



2 第IトレンチA7・A8グリッド側壁(西から)

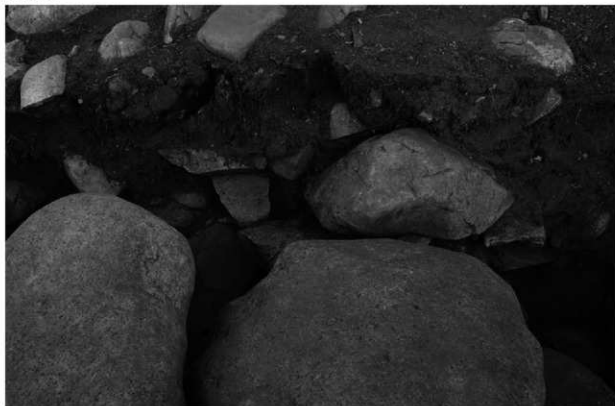


1 第IトレンチA1グリッド西壁



2 第IトレンチA2グリッド西壁

図版10



1 第IトレンチA3グリッド西壁



2 第IトレンチA4グリッド西壁



1 第IトレンチA5グリッド西壁



2 第IトレンチA6グリッド西壁

図版12



1 第IトレンチA7グリッド西壁



2 第IトレンチA8グリッド西壁



1 第IトレンチA9グリッド西壁



2 第IトレンチA10グリッド西壁

図版14



1 第Ⅱトレンチ全景（西側填丘袖から）





1 第Ⅱトレンチ全景（東側墳頂部から）

図版16



1 第ⅡトレンチB1グリッド北壁



2 第ⅡトレンチC1グリッド北壁



1 第ⅡトレンチD1グリッド北壁



2 第ⅡトレンチE1グリッド北壁

図版18



1 第ⅡトレンチF1グリッド北壁



2 第ⅡトレンチG1グリッド北壁



1 第ⅡトレンチH1グリッド北壁



2 第ⅡトレンチG1グリッド東壁

図版20



1 第Ⅰトレンチ埋め戻し後全景



2 第Ⅱトレンチ埋め戻し後全景



1



2



3



4

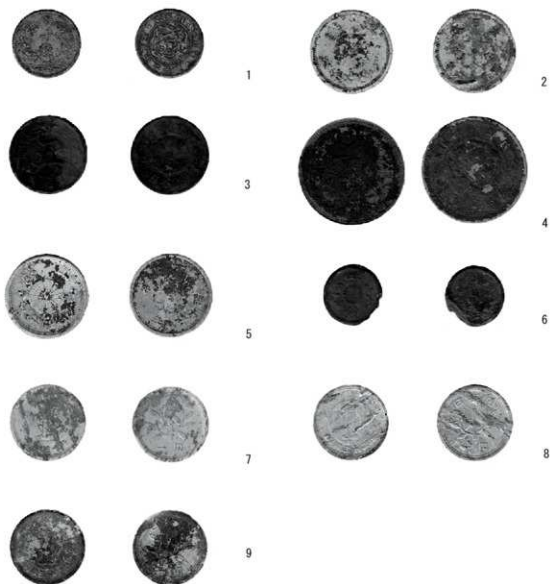


5



6

图版22





## 報告書抄録

ふりがな	ながのけんあづみのし ほたかこふんぐん 2010ねんどはっかつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県安曇野市 穂高古墳群 2010年度発掘調査報告書							
シリーズ名	國學院大學文学部考古学実習報告							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	(編集) 吉田恵二 中村耕作 (著者) 浅海莉絵 伊原 駿 大久保聡 北澤宏明 坂倉水悟 酒匂喜洋 戸田千曉 長島美砂希 日原章博 森 知之							
編集機関	國學院大學文学部考古学研究室							
所在地	〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 TEL03(5466)0248							
発行年月日	2011(平成23)年8月31日							
遺跡名	所在地	市町村番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほたかこふんぐん 穂高古墳群 F9号墳	ながのけんあづみのし 長野県安曇野市 穂高柏原3653	20220	2-F9 (穂高古墳78)	36° 19' 08"	137° 51' 29"	20100802 ～ 20100811	17㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物			特記事項		
穂高古墳群 F9号墳	古墳	古墳 後期	F9号墳：長径約13m、高さ約1.7mの円墳。須恵器片（フラスコ型長頸瓶口頭部、蓋、甕）、土師器片、近代陶器、硬貨、釘			鳥川扇状地の南側に位置するF群の中で最も上位に位置し、二つ塚と通称される2基の古墳の1基。		
要約								
今年度は、F9号墳の発掘調査を行い、墳丘の内部状況を確認した。第Ⅰトレンチからは石室の側壁と思われる二段に重なった石材を確認した。また、須恵器片と土師器片が出土したが明治～昭和期の硬貨も出土しているため、攪乱層と考えられる。第Ⅱトレンチは全体に黄色土と礫による攪乱が見られ墳裾周辺では地山層と考えられる土層を確認することができたが、現調査深度よりも攪乱が深く、それよりも下位の土層堆積状況は未確認である。また、このために周溝は確認できなかった。								

※昨年度報告では所在地・市町村番号に誤りがありました。

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾なく、この報告書を複製して利用できません。なお、利用にあたっては出典を明記してください。

## 発掘調査参加者・関係者一覧

### 平成22年度考古学実習生

浅海莉絵・伊原 駿・北澤宏明・坂倉永悟・戸田千曉・長島美砂希・日原章博・森 知之

### 発掘特別参加者

伊藤 愛・加藤大二郎・久我谷溪太・小宮美紀・坂才 瞳・酒匂喜洋・芳賀裕太・長谷川千絵（以上國學院大學学生）・遠藤 誠（本学聴講生）・朝倉一貴・大久保 聡・有福小百合・江戸邦之・久保田健太郎・齋藤 唯・佐藤周平・佐藤直紀・鈴木孝規・中島金太郎・成田 裕・西田親史・山口 晃（以上國學院大學大学院生）・上田 翼・蔵野泰洋・濱 碧・中島大輔・中橋辰也（以上本学卒業生）

### 調査協力機関・協力者

国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・アルプスあづみの公園管理J.V.  
長野県教育委員会・安曇野市教育委員会・公園緑地管理財団・安曇野市穂高郷土資料館・ビジネスインあづみ野・長野県立歴史館・松本市立考古博物館・あづみの公園歴史愛好会・信濃毎日新聞社・市民タイムス・渋谷氷川神社  
青木 敬・稲田美里・内川隆志・内田利幸・内掘 団・太田圭郁・加藤里美・桐原 健・篠遠富恵・杉山林継・関 広克・高野晶文・多田博志・田中大輔・土屋和章・那須野雅好・服部和弘・原 智之・古谷 毅・松井雅彦・三木 弘・村松誠支・山岸美夫・山下泰永・山田真一

### 見学者

石橋 宏・石守 晃・市川淳子・植原郁子・植原武義・重野昭茂・重野典茂・白沢 勇・竹内 崇・谷口桂子・谷口 萌・中川 香・丸山三夫

---

國學院大學文学部考古学実習報告 第45集

長野県安曇野市  
穂高古墳群  
2010年度 発掘調査報告書

2011年8月31日 発行

編集 吉田 恵二

中村 耕作

発行 國學院大學文学部考古学研究室  
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

電話 03 (5466) 0248

印刷 よしみ工業株式会社

---

Archaeological Research  
at  
the HOTAKA TUMULI



August , 2011

Department of Archaeology,  
Faculty of Letters,  
Kokugakuin University

4-10-28 Higashi, Shibuya-ku, Tokyo, JAPAN 150-8440